

にちぎん

2018 NO.54

夏



インタビュー 扉を開く

鈴木明子 プロフィギュアスケーター
引退決意から見つけたもう一度輝ける舞台

地域の底力

徳島県名西郡神山町
人が人を呼び互いに触発する人間交差点徳島県神山町

対談 守・破・創

村治佳織 クラシックギタリスト | **鈴木人司** 日本銀行政策委員会 審議委員
出会いと発見を通じて人生を豊かに楽しもう

エッセイ “おかね”を語る

竹内 薫 サイエンス作家 高等数学としてのお金

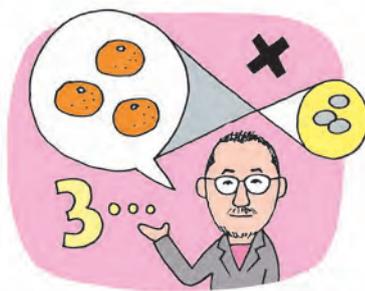
特別対談

五神 真 東京大学総長 | **中曾 宏** 日本銀行前副総裁
「知の協創」の拠点として大学が社会変革を駆動する

人類が他の生物と決定的に違うのは、言葉を進化させ、抽象的な概念を生み出したことだ。ミカンが三個あることがわかる動物はたくさんいるけれど、具体的なモノを指し示さない数字の「3」から始まり、具体的な数字も明示しない変数「x」が登場し、変数同士の関係性を意味する関数 $f(x)$ へ……というのは、地球上では、人類にしかできない芸当だ。

人類は、ミカン三個をリングゴ三個と物々交換し始めたが、このシステムは具体的すぎて不便だった。そこで、ミカン三個とリングゴ三個の関係性、いいかえると「価値」を媒介する関数として「お金」を発明した。私みたいな物理学が専門の人間からすると、お金というのは、複雑怪奇な関数そのものだ。

お金は地震と同じで、確率的にしか予想ができない。地中深くの微小な地殻のズレは、そこで終わるかもしれないし、周囲に波及して大地震を引き起こすかもしれないが、どちらになるのかは、誰にもわからない。スーパーコンピューターでも量子コンピューターでも計算できない。それと同じで、モノの価値や「モノとモノの関係」の価値も、確率的にしか計算できない。株価の大暴落を事前に知ることは誰にもできない。千鳥足の酔っ払いが、次に右に傾くのか、左に動くのか、誰にも（本



絵・江口修平

高等数学としてのお金

竹内 薫

人にも）わからないのと同じだ。

お金は高等数学だ。その証拠に、数学者がお金を「専門」に研究し始めると、信じられないような収益を上げるヘッジファンドが登場する。あるいは、仮想通貨の仕組みだって、突き詰めれば数学だ。一〇年後、AI社会が到来したとき、高等数学としてのお金は、いつか、どこまで進化するのだろうか。

こんなことを書くと、まるで私がお金の本質を理解している人みたいに聞こえるかもしれないが、高等数学を理解しているからといって、目の前のお金の扱いが上手いとは限らない。以前、物理学者の飲み会で、精算の段になって、「どうやったら最適な方法で精算ができるか」を論じている間に、お店の人が「ささっと電卓で計算してみました。お一人五三三二円になります」と言ってきた。皆で顔を見合わせたことがあるが、具体的なお金の問題は、扱うのがきわめて難しい。

目下の私の関心事は、個人的な財務状況の改善だ。無駄使いが多く、住宅ローンの利払いも見直しが必要なのだ。残念なことに、お金は私の専門外なので、社労士と税理士にお金を払って、アドバイスをもらっている。やれやれ。



たけうち・かおる ●猫好きサイエンス作家。東京大学理学部物理学科卒。マギル大学大学院修了。理学博士。AI時代を生き残るための先進教育、不登校・ホームスクーラーのためのプロジェクトを運営。最新刊は『子どもが主役の学校、作りました。』。



2 エッセイ／“おかね”を語る
高等数学としてのお金 サイエンス作家 竹内 薫

4 インタビュー／扉を開く
鈴木明子 プロフィギュアスケーター
引退決意から見つけたもう一度輝ける舞台



9 地域の底力——徳島県名西郡神山町
人が人を呼び互いに触発する人間交差点徳島県神山町

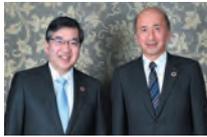


18 対談／守・破・創
村治佳織 クラシックギタリスト
鈴木人司 日本銀行政策委員会 審議委員
出会いと発見を通じて人生を豊かに楽しもう

日本銀行のレポートから

24 「経済・物価情勢の展望」(展望レポート) —2018年4月—

26 「金融システムレポート」—2018年4月—



30 特別対談
五神 真 東京大学総長
中曽 宏 日本銀行前副総裁
「知の協創」の拠点として大学が社会変革を駆動する



38 トピックス
日本銀行の総裁再任、副総裁就任ほか

43 AIR MAIL from London
時を刻み、時を見守る 2本の針

表紙のことは

日本銀行秋田支店は、大正六年（一九一七）八月に、日本銀行の二番目の支店として開設されました。東北地方では福島支店に次いで二番目となります。

支店開設前、県内の地元銀行は、福島支店から現金を輸送するために往復三日を要するなど不便を余儀なくされてきました。そこで、秋田県経済の発展を踏まえて、日本銀行は秋田支店を設立しました。

表紙の現店舗は、初代店舗の老朽化に伴い、昭和二十七年（一九五二）十一月に建て替えられた二代目です。建物外観は、縦横に走る壁面など資材そのものが描く機能的な美しさを取り入れたデザインとなっています。

完成時には、県内で初めて設置されたエレベーターの見学に、近隣の方々や小・中学生が多数訪れたそうです。

秋田支店は、昨二〇一七年に開設一〇〇周年を迎えました。これからも秋田経済の発展に貢献していきたいと考えています。



表紙・画 北村公司

プロフィール
フィギュアスケーター

鈴木明子

Akiko Suzuki

バンクーバー、ソチと二大会連続の冬季オリンピック出場など、フィギュアスケートで輝かしい実績を残した鈴木明子さん。二〇一四年の引退後も若手選手の振り付けやテレビ中継での解説、全国でのアイスショーや講演など幅広く活躍している。オリンピックの舞台で体感した特別な雰囲気、今のフィギュアの魅力と課題、競技生活にピリオドを打つ決意から見えてきたものまで、ありのままに語っていただいた。



引退決意から見つけた もう一度輝ける舞台

オリンピックは

「国」を感じる特別な舞台

——鈴木さんは、バンクーバー、ソチと二度の冬季オリンピック出場を果たし、今年二月の平昌^{ピョンチャン}オリンピックでは、現地の解説者として活躍されました。

鈴木 私にとってオリンピックを「現地で見ると」という初めての経験でした。子どものころに開催された長野オリンピックも、テレビで見るだけだったんです。

平昌で一番印象的だったのは、ファンや応援する人たちが本当にオリンピックを楽しんでいる姿でした。選手で参加したときの私は、閉会式でようやくほっとして、少しは楽しかったなと思えたけれども、競技自

体はとて余裕を持って楽しむということではありませんでした。とくにソチでは足のけがの状態が良くなかったり、練習が十分積めていなかったり、楽しむどころか不安のほうが大きくて……。

しかし、見る側で参加すると、オリンピックは本当にスポーツの「祭典」だと感じたんです。応援する選手が勝ったら喜び、負けたときには悔し涙を流し、世界中の人々がスポーツで感情を揺さぶられている。しかも、そこで受け取る感情を他の国の人たちと共有し、一緒に笑顔になったり、泣いたりもできる。これがオリンピックのある

べき姿なんだなと。オリンピックの素晴らしさというか、なぜこれだけ世界の人々を惹きつけるか、現地で見て初めて気づかれました。

——選手で参加するとなかなか楽しめないのは、オリンピックは特別だからでしょうか。

鈴木 特別です。注目度や環境が変わるんです。毎年開催される全日本選手権やグランプリファイナルなどフィギュアスケートに注目していただく機会が多いのですが、オリンピックになるとメディアの数が圧倒的に増え、スポーツ関係以外のメディアでも報道されるようになります。選手は、普通の試合より結果を求められるし、「国」というものをすごく感じるようになります。日本代表のチーム

で戦うことも多いサッカーや野球とは違って、フィギュアスケートは個人競技なので、私は、海外の試合でも「国」を背負って臨む感じはありませんでした。自分のために努力した成果を出す、という気持ちのほうが強かったのです。しかし、オリンピックの舞台だけは自分よりも「国」を強く意識する瞬間でした。

選手が競技に備える環境も、オリンピックでは変わります。普通の試合では三日ほど前からホテルに泊まりますが、オリンピックでは選手村で他の国や競技の選手と長期間滞在することになるからです。練習の様子も、取材カメラにずっと撮影されます。私は、バンクーバーではこうしたことを全て初めて経験したので、良いも悪いも含めて緊張が続き、自覚しないストレスが大きかったかもしれません。ただ、終わったときに「こままで来て良かったな」と感じたんです。「バンクーバーが最初で最後のオリンピック」と決めて臨んでいましたから。

——四年後のソチへ向かう思いは湧いてこなかった。

鈴木 私は当時、二四歳でした。バンクーバーは素晴らしい経験だったけれど、そこに至る過程を振り返ると苦しいことばかりが浮かんできました。もう一回、オリンピックを目指すとなれば年齢的には厳しくなる。そんな中で、あの練習に自分が本当に耐えられるのか……。

バンクーバーを目指していたときは、何が何でも行きたいと思っていましたから、どんなに練習が苦しくてもやるしかない、耐えることができました。「オリンピックに向かうためには生半可な気持ちでは無理」。そう知っているからこそ、私は自問自答を繰り返していました。「私には次のオリンピックにかける情熱が本当にあるのか」と。それでも、二〇一二年の年末——ソチオリンピックの一年前に私は記者会見し、もう一度目指すことを発表しました。同時に、「ソチに行けても行けなくても、あと一年で競技生活をやめる」と引退宣言もしたんです。

——期限を決めたことで頑張る力が湧いてきた。

鈴木 そうです。期限を決めずにやっていたバンクーバーからの三年間、頑張っていなかったわけではありません。しかし、頑張り切れていなかった。なぜならゴールテープが見えない中で走っていたからです。ゴールが見えればダッシュもできる。それが明確に見えなくては、全

力をかけて頑張り切ることができないのです。

期限がなかったら、苦しいことから逃げたくなる、後回しにしたい。多くの人がそうだと思うんですよ。でも、期限があれば、そこに向けて何とかやろうというところがある。命も一緒だと思っていて、人間は必ず終わりが来るから、命を全うできるのかなと思うんです。

ＩＴを使う練習でジャンプ技術が高難度に

——選手時代、目標達成のために「想像力」が役に立ったと著書で述べていますね。

鈴木 たとえばオリンピックに出場し、自分はどうかになりたいか。順位やメダルを手にした自分を想像するだけでは甘いと考えていました。メダルを得た瞬間、私は満たされ、その先が空っぽになると思ったからです。想像は、物質的・数字的な目標の向こう側まで見なければいけません。目標達成したとき自分がどんな気持ちになるか、応援する

家族はどんなふう喜んでくれるか、そんなところまでリアルに想像すれば、自分でワクワクしますよね。人間って、ワクワクすると「頑張ろう」というモチベーションが大きくなるんです。

選手時代に身につけた想像力は、今のお仕事にも役に立っています。周りの人たちが喜ぶ姿を想像する力はモチベーションを上げることにつながるなど、あらためて感じますね。

——もう一つ、「客観視」する力も選手時代に身につけたと。

鈴木 「客観視」はフィギュアスケートが採点競技だったからこそ身についたものです。自分の演技を一步引いたところから客観的に見る目がないと、試合で上位には行けません。そこはコーチにも見てもらうことで自分の感覚との差を埋めています。

私の選手時代の後半の時期には、タブレット端末を利用する練習が増えました。とくにジャ





すずき・あきこ ● 1985年愛知県豊橋市生まれ。6歳のころからフィギュアスケートを始め、15歳で全日本選手権4位に。東北福祉大学在学中の21歳でユニバーシアード冬季大会優勝、24歳でグランプリシリーズ初優勝。以後、日本を代表する選手の一人として活躍。2010年バンクーバー冬季オリンピック8位、11年グランプリファイナル2位、12年世界選手権3位、13年全日本選手権優勝、14年ソチ冬季オリンピック8位などの実績を残す。14年3月の世界選手権出場を最後に現役引退。現在は、プロフィギュアスケーターとしてアイスショーに出演するほか、解説者、振付師としても活動。テレビ、ラジオ番組の出演、全国での講演活動なども行っている。著書に『笑顔が未来をつくる——私のスケート人生』（岩波書店）、『「等身大」で生きる——スケートで学んだチャンスのつかみ方』（NHK出版新書）などがある。

ンプのフォームの確認で活用しました。自分では真つすぐ飛び上がっているつもりでも「右に傾いていたぞ」とか、コーチが手軽に撮影し、その場で動画をを見せてくれる。選手は自分の感覚のズレを客観視し、修正しやすくなりました。ここ数年、ジャンプの技術がすごく伸びていますが、それはこうしたITを誰でも手軽に駆使できるようになったからだと思います。

——練習方法が変わり、技術の

緻密な部分が進化した。

鈴木 技術的にどんどん高難度になる一方で、選手にはけががものすごく増えています。難度が未知の領域にまで入ったのに、トレーニング方法などが追いついていないのが現実で、「どこも痛くない」という選手はいないぐらい、けがや故障の不安が広がっているんです。選手寿命が短くなってしまう恐れもあるので、国際スケート連盟も選手の手体のケアについてもっと

考えてもらいたいと願っています。

技術だけではなく表現も競い合うのが、フィギュアスケートの面白いところです。そもそも、「フィギュア」は氷の上にも、図形を描くことに由来しています。一九九〇年までは「コンパルソリーフィギュア」という種目があり、選手は滑るとき姿勢や滑り跡の正確さを競いました。それは見る側としては面白くないので競技から外されてしまいました。本来は美しいスケート技術がフィギュアスケートの核になるものです。

——その根本的な部分を見つめ直すことも必要でしょうか。

鈴木 近年は若い選手の活躍が目立つけれど、スケートイン

フィギュアファンと練習リンクを増やしたい

——鈴木さんが引退されたのは二九歳のときでした。

鈴木 フィギュアの世界では、二〇代後半になって競技を続けること自体がめずらしく、私

技術だけでなく表現も競い合う方向で見直されていくと、息の長い選手も出てくるはず。氷の上を滑る技術は積み重ねるほどに向上するし、重みも増します。選手自身の人生経験も表現となって返ってくるので、ベテランから語り継がれるような演技が生まれるかもしれません。選手は二〇歳前後でスケート人生のピークを迎えてしまうより、もっとその先があるといいなと思います。なぜなら、素敵なスケーターの演技はできるだけ長く見たい、と思うのがファンの気持ちです。ね。そのためには選手寿命が長くなるように、ギリギリのところまでやるしかないような今の状況は変わってほしいです。

の選手生活はまれに見る長さでした。ただ、私には、あの年齢になってから感じられたこと、一〇代では気づけなかったことがたくさんあります。苦しいこ



とも多かったけれど、今は長く
続けて良かったという気持ちし
か残っていません。

ソチオリンピックの一年前に
引退を決めたら、その先のこと
をすごく考えるようになったん
です。考えた末の結論は、「オ
リンピックが自分の人生のハイ
ライトじゃない」。次にやりた
いこと、自分のビジョンといっ
たことが見えてきて、これから
もっと自分は輝けると思えたか
らです。競技に情熱を注ぐ選手
ほど、引退したら全てが終わる
みたいに感じてしまうのです

が、そこから先も人生は続いて
いきます。私の場合は、「ソチ
オリンピックに向かって今を頑
張ろう」と思うと同時に、「ソ
チは次に輝くための通過点なん
だ」と悟る心境になるまで競技
を続けたから、今は心置きなく
セカンドキャリアでやっていけ
るのかなと思っています。

——今、プロスケーターとして
全国各地のアイスショーに出演
されています。

鈴木 選手時代は競技のルール
に従ったスケートでしたが、今
はエンターテインメントの一つ
として自分のスケートを披露で
きます。競技とはちよつと違う
世界も表現し、「観てよかった、
また観たいな」と思っていただ
けるスケートを滑ろうと心がけ
ています。

引退後、現実的に「一番自分
に合うだろうな」と考えていた
のが振付師です。私はスケート
が好きで好きで、ずっと続けて
こられました。若い選手たちも
同じような気持ちで続けられ
るように、振付師の立場から手
助けできたらいいなと思って

います。

講演の仕事にも、私の経験を
伝えて誰かの役に立てたらいい
なという思いを込めています。
スケートで経験できたことを、
自分の中で完結してしまつたら
もつたないと思うようになり
ました。アイスショーで滑るこ
と、若い選手に振り付けること、
そして講演で話すこと。私はス
ケートを伝える人になって、ス
ケートが好きな人たちを増やし
ていきたいのです。

——フィギュアスケートは観客
が少ない時代も経てきました。

鈴木 人気の選手や良い成績が
出ていないと、スポーツは注目
してもらえません。現在のフィ
ギュアは良い選手を次々に輩出
して、人気も続いているけれど、
私が幼いころはマイナーなス
ポーツでした。今のようにゴー
ルデンタイムにテレビ放映され
ることはほとんどない、だから
当時の私はプロスケーターにな
ることなど全く考えていません
でした。

——日本のフィギュアは格段に
レベルが上がリ、選手を目指す

人も増えたのではないですか。

鈴木 増えています。しかし練
習リンクは増えていないんで
す。一時期リンクの数がすごく
減り、その後少し戻ってきてい
ますが、リンクの利用が限られ
たりするために、練習場所の確
保に苦労している選手は少なく
ありません。朝早く、四時とか
五時に起きてリンクに向かい、
親がマネジャーのように送り迎
えし、夜遅く帰ってくる……。
だけど、そんな無理は長く続き
ません。

現在の日本のフィギュアは
「西高東低」ですが、これは中
京大学や関西大学にアイスア
リーナが整備された一方、首都
圏にはトップ選手のための練習
時間を確保してあるリンクがな
いからです。私は、東京にもス
ケート選手専用のリンクができ
たらと、ずっと思っているんで
す。そうすればきっと、ロシア
のようなフィギュア大国にも勝
てるようになるはずですよ。

——本日は、ありがとうございます。

（聞き手／情報サービス局長取材当時：鶴海誠）

地域の底力—— 神山町

人が人を呼び 互いに触発する 人間交差点 徳島県神山町



「よそ者」を受け入れる
緩やかな心が育まれた
山あいの小さな町で、
新たな出会いの数々が
人々の意識をゆつくりと変え、
未来の物語を紡いでいく。





NPO 法人グリーンバレー理事長の大南信也氏は建設業を営む傍ら、国際交流などの地域活動に取り組む。20代の頃にスタンフォード大学院で学び、黎明期のシリコンバレーの自由な空気にふれた体験が、大南氏の原点になっている。

すべてののはじまりは 青い目の人形から

徳島県のほぼ中央部、山々に囲まれた神山町の誕生は、五村が合併した一九五五年にさかのぼる。一帯の歴史は古く、阿波の語源とも伝えられる「粟生の里」としてはるか古代から交流の拠点だったという。

合併当時、約二万人だった人口は現在、約五四〇〇人。年々過疎化が進んでいたが、近年になり移住者が少しずつ増え、二〇一一年にはわずかに二人ながらも転入が転出を上回る状況となった。自然豊かなのどかな田舎という感のある町を歩けば、洒落た飲食店やモダンアートが点在。東京等のI

T企業ほか一六社がサテライトオフィスを構え、海外からもクリエイターたちが訪れるとは、この小さな町でなにが起きているのだろうか。

そもその発端は一体の人形だったと振り返るのは、移住支援を中心とした活動に取り組むNPO法人グリーンバレー理事長大南信也氏だ。一九二七年、友好の象徴としてアメリカから約一万二〇〇〇体の人形が日本各地に送られた。多くは戦時中に処分されたが、神山町の青い目の人形アリスが奇跡的に難を逃れたのを知り、大南氏は現地の協力を得てその贈り主を探す。一九九一年には、アリス、一〇名の子どもたちとともに訪問団がペンシルバニア州を訪れ、人形の里帰りが実現した。

「おもしろかった。何かが動き始めるかもしれない。そんな流れができました。成功体験を経て、また何かやりたいという思いが関係者のなかに生まれたんです」
一九九二年には「神山町国際交流協会」を設立し、徳島県内に赴任したALIT（外国語指導助手）を民泊で受け入れる試み「神山



二〇一二年のアーティスト・イン・レジデンスで招聘された、出月秀明氏の作品「Hodon Labav」。本を収めた神山町民だけが鍵を持つことができる。

ウィークエンドプログラム」が始まる。

「約五〇名の外国人が、町に滞在する。最初は目立つ異質な存在でしたが、毎年行われるうちに、それが風景の一部と化して当たり前になってきました」

外国人とのつきあいに町の人々が次第に慣れていくなか、一九九九年から「アーティスト・イン・レジデンス」を展開。国内外のアーティストを公募して町に招聘し、数カ月にわたり作品作りに取り組んでもらう、今も続くプログラムだ。

一年目は外部の学芸員の力を借



りて既に名のあるアーティストを招いたが、神山だから来た、との思いが感じられなかったことから方向転換を図る。

「僕らはもともと国際交流からスタートしていましたが、アーティストといろいろなやりとりをする中で一緒にあって作品を残したいの思いがあったんです」

二年目からは学芸員に頼ることなく自分たちで公募を仕切ること。限られた予算や設備の実情な



プラットイーズ取締役会長の隅田徹氏。社屋として使われている古民家のまわりにめぐらされた縁側は隅田氏の発案で新たに設けられ、社員たちの憩いの場所に。

オフィスは一見、昔ながらの古民家だが、徹底した耐震補強がなされている。敷地内の広場では、映画祭や七夕祭りなど、町民を巻き込んだイベントが行われる。



どをきちんと告知した上で、それでもなお神山を選んでくれたアーティストが訪れるようになる。いわゆるよそ者を受け入れる土壌が形成されるなか、二〇〇四年

NPO法人グリーンバレーを設立。二〇〇八年から「ワーク・イン・レジデンス」と名付けられた移住支援が進められるが、そのスタンスもまた独自。

「例えば、神山にはパン屋さんがないからオープンしませんかと、足りないものをこちらで指定して外部の人に補充してもらおう考え方でした。普通は行政が対応するので、公平性を求められます。でも、移住者はずもとの神山の住民とともに、これから一緒になって新しいものをつくり出すわけですから、こちらが選ぶのは当然だと思っただけです」

結果、個性や技術をもった人々

が神山に興味を持ち、カフェ、ピッツェリア、オーダーメイドの靴店などが誕生する。同時期、神山町では全国に先駆けて光ファイバー網を整備し、東京よりも快適な高速通信が可能になった。ほかとは少々異なる移住の流れや通信環境のうわさは少しずつ広まり、IT企業をはじめとするサテライトオフィスの場として選ばれるという次の幕が開く。

寛容性と多様性を併せ持つ田舎町

二〇一三年から神山にサテライトオフィスを出し、自らも移住した東京・恵比寿に本社のあるプラットイーズ取締役会長の隅田徹氏すみたてつによれば、発端はBCP（ビジネス・コンティニューイティ・プラン）の一環としての拠点分散の検討だったという。業務の軸は、映像コンテンツの編集、配信。ベントチャー誘致に動く全国一九の自治体が候補にあがるなか、おもしろそうな田舎があるとの情報を得て神山を訪れ、グリーンバレーを紹介された。



鮎喰川沿いの宿泊施設「WEEK 神山」はプラットイーズの隅田氏らが中心となり、企業や個人からの出資を得て完成。向かいに位置する神山バレー・サテライトオフィス・コンプレックスとも連携しており、ビジネスユースも多い。

「ほかはすべて行政が窓口だったので、明らかにムードが違っていたんです。来たければ来れば？という対応がとってもらえれば都会的な感じで、印象に残りました」

よそでは減税をはじめ多様な誘致策が提案されたが、一時期のメリットよりも長期的な環境を重視し、神山が選ばれた。

神山と東京という勤務地の選択は社長を含め肩書に関係なくでき、評価や出世に影響することはないとスタッフに明示したものの、当初、東京を離れたのは先導

神山バレー・サテライトオフィス・コンプレックスの案内役を務めるコンシェルジュの木内康勝氏。木内氏の後ろの書棚をはじめ神山杉を用いた内装は、神山メイカースペースのアーティストたちが手がけている。



する隅田氏ひとり。しかしながらその後、神山での体験滞在や出張を経て、移住を希望するスタッフが出てくる。さらには新たな事業展開のための公募により、地元や徳島県内からの雇用が生まれた。

「今の新卒の中には、高学歴でとがったセンスで、地方志向の人

がいる。皆と同じような就職活動をせずに地方で暮らしたいという人が存在するのを、募集して初めてわかりました」

もとは造り酒屋だった古民家には、パソコンやモニターがところ狭しと並ぶ。スタッフは神山に一八人、東京は約九〇人。離れているとはいえ、マネジメントツールを使えば業務の進捗やスタッフの状況は把握できる。納品はインターネットを利用し、備品は通販販売で注文の翌日に配達。東京にいても神山にいても、仕事を進める上では全く変わらないと隅田氏は話す。

築二〇〇年の古民家を借りて住む隅田氏は、事務所の敷地内でイベントを開催するなど、地元と積極的に交流。神社や公道の清掃など、東京では想像もしなかった地域住民の共同作業にも、新鮮な驚きを持ちつつ参加する。

「この町は何でも、基本的にボランティアなんですよ。『絶対』、と決めてしまうと不参加の人に対して険悪な空気が生まれますが、上手にルールができています。何かをまとまってやるわけではなく、こ

れもあり、あれもあり。人口の減少よりも、その結果、人が偏って排他的になるのが田舎の問題ではないかと僕は思っているんです。神山には寛容性と多様性がある。いかげんというか、緩いというか……」

うれしそうに笑いながら語る隅田氏の表情は、神山での毎日と人のつながりを楽しんでいることを物語っていた。

一軒の店が変えた 人々のライフスタイル

単に移住者が増えただけではなく、町の人々の生活や意識に変化をもたらす人が目立つのも神山の特徴だ。「カフェ・オニヴァ」のオーナー齊藤郁子氏もまた、然り。

もともとは、東京に日本人を置く世界的IT企業Apple（アップル）の社員。アウトドア仲間の友人が神山に移転したのがきっかけで、二〇〇三年に初めて神山を訪れたが、最初から移住や今のビジネスを考えていたわけではなかったそうだ。

「東京での暮らしは刺激的でし

かつて造り酒屋だった建物は、軽トラック、山の所有権とともに売りに出していた。エコハウスの建築など、山の活用についても齊藤氏の夢は広がる。



たし、大きな仕事にチームで取り組むわくわく感もありましたが、年をとるとともに人生の質について考えるようになったんです。もともと自分でクリエイティブに物事を決められる暮らしはないかなと模索していました」

やがてインターネットで神山の古民家売り出されているのを見つけて、購入。集客について周囲から懸念する声もあるなか、二〇一三年十二月にカフェ&ビストロをオープンする。

「どんなところでも、おいしいければ人は来てくれる、との思いがありました。高い家賃や給料を払う東京の飲食店では、採算を合わせるためにどこかで妥協すると思

カフェ・オニヴァの齊藤郁子氏は2015年に株式会社化した際、ともに店を支える3人のスタッフと株を等分。「物事は皆で決める。責任も四等分がいいと思っています」と話す。



うんですね。でも、ここでは家賃がいらないうし、よい生産者さんが近い。どんなに高くても、できるだけ自然に近い食材を使い、本当に自分が食べたいものを出したいと考えていたんです」

おいしいいわさは次第に口コミで広まり、徳島市内をはじめ遠方から訪れる人も。さらには、カフェやワインには縁がないと思われていた地元の高齢者も、扉を開けるようになった。

「おじいちゃん、おばあちゃんが二人で御飯を食べに来られたり、野じまいという畑仕事の終わりや今日はよく頑張ったというときに寄ってくれたり」

店内には薪ストーブがあり、そ

の薪を持参すれば、ワインや料理が無料になる「薪通貨」も次第に浸透。取材中も予約の電話が何度か鳴るほどの人気ぶりだが、店は週休三日。冬場の三ヶ月を含め、年の半分は休みを取り、国内外を旅する。

その理由は、おいしい発見を神山に持ち帰り、町の人たちと幸せを共有したいから。齊藤氏をはじめめ店を支える四人のチームは、二〇一八年夏には、フランス・ボルドーの日本文化紹介イベントで調理を担う。その成果や人の縁がまた、神山にもたらされるのだろうか。

アーティストとの共同作業が変化を生む

ものづくりが好きで有志が集まりグリーンバレーと神山町の支援を受けてつくられた「神山メイカースペース（二〇一七年法人化）」の代表を務めるあべさやか氏も、町の人々とのつながりを楽しんでる移住者のひとりだ。オランダ在住時の二〇一三年にアーティスト・イン・レジデンスで滞在し、三年後にはアイルランド人

の夫スウィーニー・マヌス氏とともに移住した。

「アーティスト・イン・レジデンスで一番印象に残っているのは、町の人との共同作業ですね。道具や材料がそろっていたわけではないし、皆さんがアートの慣れしていないわけではないのですが、それでも歓迎してくれて、いろいろな形でサポートしてくださった」

宿舎に山盛りのナスが差し入れで置かれてあったのも驚きの経験だったと、当時を懐かしむ。お裾分けがあたり前の田舎でありながら、年配の世代でも、新しいものに対して好奇心があるのもおもしろかったという。

神山メイカースペース代表のあべさやか氏と、あべ氏の指導のもと、神山杉をつかったレーザーカッターによる作品づくりに励む県立城西高校神山分校の「森林女子部」の生徒たち。

レーザーカッター、3Dプリンターなどの最新機器を備えた「神山メイカースペース」のコアメンバーは一〇名。



アーティスト・イン・レジデンスの際、あべ氏は特産品である梅干しを町の人々に食べてもらってポートレートを撮影するなど、周囲の協力を積極的に得て作品づくりに取り組んだ。





阿波銀行経営役の須見憲昭氏。神山に根を張り、サテライトオフィスが続々と増える状況や町の魅力を体感しながら、地域の金融機関としてサポートを図りたいと話す。

「活動の三本柱は、研究開発と教育、シェア。日々、個々に活動しながら場所を共有し、お互いに情報や知識を交換して、より面白くクオリティーの高いものを生み出すというものです」

メンバーは本業の傍ら、特徴を活かした授業を行うなどして町と関わりを持つ。あべ氏は、県立城西高校神山分校の「森林女子部」と呼ばれる女子生徒にリーダーカッターを活用したもののづくりを指導する。

「廃材を使い、デザインから考

える商品開発。販売もしています。

最初は何も言えなかったような生徒もやりがいを感じ始め、将来はデザイン関係の仕事につきたいという子も出てきました」

二〇一八年七月には、夫のマヌス氏とともに軽食も楽しめるビールの醸造所「KANIYAMA BEER」をオープン。グラス片手にひととき過ごせる新たな交流の場が、またひとつ神山に生まれた。

「地方創生を意識して移住したわけではありませんが、神山の動きはとても多角的なんです。国内外から集まってくるウェブデザイナーやプログラマー、アーティスト、さまざまな農業に従事する人々。いろいろな人が小さな町に点在して行き交う『人間交差点』。それぞれがとも突き出ているので、飽きることがありませんね」

人が人を呼ぶ 神山独自の流れ

「神山マイカースペース」があるのは、二〇一三年一月に誕生した「神山バレー・サテライトオフィス・コンプレックス」の一角。町

徳島県の新未来創造担当室長の原内孝子氏。神山バレー・サテライトオフィス・コンプレックスには、現場の声を直接聞いて政策につなげたいという思いから、徳島県庁のサテライトオフィスも設けられた。下／地域づくりを担う若者を養成する「神山塾」の拠点としても機能。写真は2018年4月に行われた第10期入塾式。



所有の縫製工場だった建物を利用したコワーキングスペースだ。現在、一三社がここにサテライトオフィスを構え、多種多様な人々が行き交う場となっている。

サテライトオフィスのひとつ、地元徳島県の阿波銀行経営役の須見憲昭氏に神山の状況を伺った。

「徳島県内各地に約六〇のサテライトオフィス企業が進出してきています。その中でも神山は、人が人を呼ぶという流れが強いのだらうなと思いました。町のために何かしたいという方々が移住され、地元の人にも顔負けに町のことを考えていますね」

その背景には、大南氏らが進め

てきた取り組みに加え、焼山寺という四国八十八箇所しやうざんじの十二番札所があることも影響しているのではないかと須見氏は話す。四国ではお遍路さんを接待する文化が根付いているが、十二番札所は最初の難所。くじけそうになる人々を温かくもてなす気質が受け継がれているのかもしれないという。

「東京では朝の満員電車で揺られ、夜暗くなるまで働き、疲れてまた電車で揺られて帰る。でも、自然の中でも、パソコンがあれば仕事ができる。従業員は精神的に満たされる上、給料の水準も変わらない。家賃などの出費も少ないから貯蓄できるし、やりたいこと





外側が白く、内側が赤い杉の断面を活かしてできたコップは、デザインだけではなく保温性にも優れている。



キネトスコープ社代表で「SHIZQ プロジェクト」を立ちあげた廣瀬圭治氏。町役場等と連携して神山杉のブランド化を進めつつ、施主が山で建材用の杉の木を選べる新たな展開も始動。

もできる、子育てにも適している。おかげで、優秀な人材が雇用できるようになったという声を聞きますね」

移住者を含めて町中の人がS N Sで集まる仕組みが構築され、徳島市内でも見ないほど大勢の、しかも世代を超えた人々がイベントに参加しているのも印象深かったそう。

二〇一七年九月から三カ月間、というふれこみで始まった阿波銀行のサテライトオフィスが現在も継続しているのは、まだまだ興味深い流れは続くという判断ゆえだという。

自然を守るために 移住者が動く

移住者のなかでは、大阪から本社を移したキネトスコープ社代表、ウェブデザイナーの廣瀬圭治ひろせきよはる氏の活動も耳目を集めている。築一五〇年の母屋を含めた古民家をオフィス、自宅として利用し、全国から集まった五名の社員とともに本業を進める一方、「SHIZQ（しずく）プロジェクト」という杉を使った商品の開発、販売も行っている。

二〇一二年十一月の移住後、廣瀬氏の心をとらえたのは、三〇年



上／かつては今の3倍の水量があったという町の中心を流れる鮎喰川。初夏には文字通り、天然の鮎が釣れる。下／鮎喰川の上流、約45メートルの「雨乞の滝」は、「日本の滝百選」にも選ばれた神山の観光名所のひとつ。

前と比べて町の中心を流れる鮎喰川の水が三分の一になったという事実だった。その原因は、緑豊かな杉の山。自然のたまものように見えるが、戦後に植えられた人工林であり、林業の衰退とともに間伐されなくなった。結果、光の差さない山の植生は変わり、保水力も失われて川の水が減ったというのだ。

「神山で暮らしていくなら、二人の息子たちの将来のためにも何かしたいと思ったのがきっかけでした。エコといえば森林の保存だと思われがちですが、一秒でも早く、一本でも多く人工林の木を切ったほうが良いという実情を広めたいという啓発活動のため、『SHIZQプロジェクト』を始めたんです」

活動が理解を得るまでには苦難の連続だった。やがてその熱意が周囲を動かし、杉の木を使った器が完成する。中心が赤く外側が白い、建材としては好まれない特徴を逆手に取り、さらには木目を横にしたデザインは、業界では考えられなかった部外者ならではの発想だ。

二〇一七年には、グッドデザイン賞を受賞。丸太を割り、一年半かけて乾燥させ、高度な職人技で仕上げるため、コップでも価格は一万円以上するが、土産や贈答品として観光客や地元の人たちが購入するだけでなく、オンラインでも全国から注文がある。また、海外にも販路が広がりつつある。

廣瀬氏は子どもたちに杉の器の



春、菜の花が咲く江田地域の棚田は黄色に彩られ、祭りやウォーキングなどのイベントも開催される。

質感を体感してもらいつつ、山について語る授業も行っている。

「僕が本当にやりたかったのは、少しずつ波紋を広げ、町の意識を変えていくということ。木のことをやっているチームだと思われがちですが、水源を守り、一滴でも水をふやしていくという、最初のマインドを忘れないように、ロゴも名前もしくなくなんです」

ゆっくりじゅっくり 継続が町を変えていく

これまで民間の動きをご紹介してきたが、神山町の行政もまた、民間と連携しつつ、じゅっくりと歩みを進めてきた。町の現状と将来のビジョンについて、町長の後藤

正和氏にお話を伺った。

「過疎の町、自然は豊か、通信基盤が整っている……。神山はアナログとデジタルが共存しています。過疎対策としては定住人口の増加が必要になりますが、最終目標の前にまずは交流人口を増やそうと、継続的に取り組みを行ってきました」

神山の特産品のひとつが、梅干し。昭和の終わり頃から、町の花にもなっている梅を主役にした「梅まつり」が行われるようになった。さらにはNPO法人神山さくら会が育成した桜の苗を毎年二〇〇本ずつ植えるという長年の努力を経て、現在、なんと六三〇〇本という数に。春には大勢の花見客でにぎわう。



2003年から神山町長を務める後藤正和氏。大手メーカーとのコラボレーションほか神山産のスタチをつかった商品開発は少しずつ広がり、東京の飲食店と地元の生産者が手を組んだイベント「東京すだち遍路」も人気を集めていると話す。



神山つなぐ公社の事業のひとつ、地産地消の飲食店「かま屋」と自家製パンや地元の特産品などを扱う「かまパン&ストア」。「かま屋」のテーブルや「かまパン&ストア」の建物は、神山杉を使用。天然酵母でつくられるパンは、遠路はるばる買いに訪れる人がいるほど人気。



かつて特産品だった温州みかんが凍害で全滅した後、家庭の庭にも実るほど日常的な存在だったスタチを売り出すべく地道なPRを重ね、今や生産量も日本一に。岩手県宮古市との友好連携により、「目黒のさんま祭り」にスタチを提携して二〇年になるといふ。

新たな取り組みとしては、廣瀬氏の力を借りつつ、神山杉のブランド化が始まった。同時に、後藤氏いわく「山をつくりなおす」対策も検討されている。

「杉を伐採し、落葉広葉樹への樹種の転換を少しずつ図っている」といっています。成果が見えるまですでは時間がかかりますが、まず

第一歩をやらなければならないことには始まりません」

二〇一六年の四月には、住まいづくりと教育を柱とした一般社団法人「神山つなぐ公社」を立ち上げた。その理由について、後藤氏はこう語る。

「行政というのは、条例や法令に準拠して執行していかなくてはなりません。会計年度も単年度ごとですから、非常に動きづらい。特に地方創生関連の事業は、継続的にやらないと成果を生まない性格のものが多いんです。例えば、人口についても、何か一つやったからといって、急に増えるわけではありません。継続性と民間の手法、

神山つなぐ公社の代表理事を務める榎谷学氏。公社が取り組む集合住宅は、住民以外の町民が利用できる文化施設と隣接。さらなる人と人のつながりを目指すという。



行政とは違ったスピード感をうまく生かして展開していきたいというのが一つの狙いです」

公社の代表理事榎谷学氏によれば、地元の木を用いた町営住宅「大榎地の集合住宅」を建築中とのこと。手がけるのは、地元の大工。手間も時間もかかるが、地域で経済を回し、仕事や技術を継承する目的があるという。

「二〇一八年八月には住宅が建ち、四戸入ります。全体では二〇戸ですが、大工さんがじっくり仕事をこなせるよう一気に進めず、施工期間を長くとっています」

耕作放棄地を利用してできた食材を使う地産地食のレストラン

や、小中高生に向けた食育体験、二〇一七年から始まったオランダの中高生との交流など、公社と民間が連携した取り組みはフィールドが広い。

「最終的には神山に住んでもらいたいのですが、それは結果であって、今はまず、より多くの人たちとの関係をつくっていききたいんです」

そう話す榎谷氏の言葉に、少しずつ、少しずつ山を彩るようになった桜の景色が胸をよぎった。

世代に関係なく 人の意識は進化する

アーティストのあべ氏が「人間交差点」と表現したように、事実神山では人と人との出会いが町の活性化につながっている。さらには住民の意識も変わってきていると、グリーンバレーの大南氏は話す。最近、徳島市内の高校に通う神山出身の生徒たちが、地元の自慢をするようになったというのだ。加えて、とある高齢者の発言にも驚かされたという。

「俺はもう七五歳だからいつ何

が起こっても不思議ではないが、神山の変化がどう続いていくのか見られなくなるのがつらい。でも、まだ五、六年は頑張れると思う。自分にできることがあるなら言ってみよう……。普通のおじいさんです。若い子は柔軟に自分を変えられることができると思っていました

が、年齢は関係ないんですね」
自分たちの活動は、プロジェクトそのものを考えることではないとも大南氏は語る。

「僕らの想像力を超えたような人たちがやってきて、物事が起りやすい状態をつくり出していく。プロジェクトを生み出す一つの場、装置としての神山町、というのをつくりたいんです」

神山では移住者が地元の人に何か提案すると、必ず返ってくる徳島弁がある。

「やったらええんちゃうん」

軽く力の抜けた、プラットイーゾの隅田氏のいう「緩い」感じが、なにかを始めようとする人々の背中を心地よく押すのだろう。頑張ってもいいし、引き返してもいい。阿波銀行の須見氏が話していた、難所に向かうお遍路さんを見

守る思いが確かに受け継がれているのかもしれない。

今は浅瀬が続く鮎喰川だが、町長の後藤氏が幼い頃は泳げるほど水量が豊富だったそうだ。桜の木がさらに増え、森が生まれ変わる未来、川で再び子どもたちの歓声があがる……。その頃、どんな人たちが、この神山に暮らしているのだろうか。神山の物語は、まだまだ続く。



守

破

対談

創

19世紀には「小さなオーケストラ」と呼ばれたギター。若くしてデビュー後、ワールドワイドに活躍している村治佳織氏と、ギターをこよなく愛する鈴木人司審議委員が、楽器の魅力や音楽に取り組む姿勢を語り合う。その考え方や生き方から人生を豊かにするポイントが浮かび上がった。



日本銀行政策委員会 審議委員

鈴木人司

Hitoshi Suzuki

1954年東京都生まれ。77年慶應義塾大学経済学部卒業後、(株)三菱銀行に入行。2002年(株)東京三菱銀行市場企画室長、06年(株)三菱東京UFJ銀行執行役員市場企画部長兼本店東京ビル出張所長を経て、常務取締役、専務取締役、副頭取、顧問などを歴任。17年7月より日本銀行政策委員会審議委員。



クラシックギタリスト

村治佳織

Kaori Muraji

1978年東京都生まれ。92年ブローウェル国際ギターコンクール及び東京国際ギターコンクールで優勝。93年にCDデビュー。その後、出光音楽賞、村松賞、ホテルオークラ音楽賞を受賞。2003年英国の名門クラシックレーベルDECCAと日本人初のインターナショナル長期専属契約を結ぶ。以後、日本を代表するクラシックギタリストの一人として活躍している。

出会いと発見を通じて 人生を豊かに楽しもう

ギターとの出会い

鈴木 村治さんは台東区のお生まれで、私は隣の荒川区の生まれです。小さい頃の思い出をお聞かせいただければと思います。

村治 活発な子どもでした。ギタリストだった父の影響でギターを始めましたが、演奏することは好きでしたし、本を読むのも好きでした。

ギターを弾くことは、日常生活の一部でしたので、お風呂に入ったり食事をしたりすると同じような感覚で、楽器を弾く時間がありました。好きだとか嫌いだとか考える前に、そこにギターがあるから弾くというような感覚でした。

鈴木 中学・高校のとき、クラブ活動はしていましたか。

村治 帰宅部でした。子どもの頃は父がギターの先生でしたが、中学・高校のときは他の先生にもついていて、いろいろな曲を勉強しました。学校には普通に通い、夕方に帰ってきてから、練習を二、三時間するのが日課でした。



私の場合、自分が意識する前にギターがあつたのですが、鈴木委員は、ご自身の意思でギターに惹かれて始められたのでしょうか。

鈴木 一三歳の頃に、母親を亡くしました。その寂しさから、家の近くの楽器屋さんでギターを買って弾くようになりました。学校にはギター部がなかったので、東京音楽アカデミーという通信教育制のギター講座を受講し、毎月送られてくる楽譜とソノシート（ビニールなどで作られた薄手の柔らかいレコード）を使って練習しました。高

校生になってまたひとつギター

を買ひ、大学でも続けました。大学を卒業し、今の三菱UFJ銀行に入った際には、接客業でもある銀行では爪を伸ばしてはいけないと言われたので、一時

中断することとなりましたが、二〇〇二年にロンドン赴任から帰ってきてから再開することにしまして、先生についてレッスンするようになりました。今はプロのクラシックギタリストとして幅広く活動されている川井善晴さんに教えていただいています。

村治 独学で学ばれたとはすごいですね。自分とは違う環境なので、ご自身の意思で始められた方をうらやましく思います。

鈴木 大ギタリストのアンドレス・セゴビアは九四歳で亡くなりましたが、晩年期までコンサートを開いていました。

楽器は高齢になっても弾けるし、ぼけの防止にもなりますよね。特にギターは右手と左手で違うことをしますから、頭を使わなければならない。

村治 どんな楽器も難しいと思

いますが、ギターは特に指の動きが細かいですよ。

鈴木 バイオリンはフレット（弦を指で押さえる部分に埋め込んである金属の横棒）がないけれども、弦を一本ずつ弾いていることが多いですね。

村治 しかもバイオリンは右手に弓を持って弾きますが、ギターの場合は指を一本ずつ動かします。

鈴木（ギターを弾くまねをして）こうやって左手で弦を押さえるので、一般的に左手のほうが指が長くなりますよね。私もそうなっています。

村治 かなり違いますね。（指をのばして）私も同じく左右で指の長さが違います。

新たな挑戦

鈴木 ところで、村治さんは、

二〇一六年、五年ぶりの録音となるアルバム「ラプソディー・ジャパン」を出され、私も愛聴しています。このアルバムは「ふるさと」がテーマということですが、どのような思いが込められているのですか。

村治 私は東京育ちなので、ずっとふるさとはないのかなと思っていました。「ふるさと」に描かれている山とか川は田舎に行かないと見られないという意識でいたのですが、数年休養した後

に久しぶりにステージで演奏できたとき、自然と「第二の家」に帰ってきました」という言葉が自分の口から出ました。生まれ育った場所だけではなく、その後長い時間を過ごした大切な場所も「ふるさと」と解釈しているのではないかと思います。大切に思っています。一方で、東日本大震災で被災された方たちのように、生まれ育った場所を大切に思う気持ちも良く分かります。こうした思いは、どこか一致する部分があるのではないかなと思えました。

このCDが生まれるきっかけは、東日本大震災の被災地の皆さまのためのチャリティーコンサートでした。そのコンサート



で弾いた曲を全てCDに録音するので、当初はタイトルも「ふるさと」にしようかとも思ったほどでしたが、世界に向けて発売するということで、「ラプソディー・ジャパン」というタイトルを選びました。

鈴木 アルバムには村治さんご自身が作曲された作品が四曲ありますが、作曲は以前から手がけていたのですか。

村治 いえ、以前は全く興味がありませんでした。演奏のみで、書かれた譜面をどのように解釈するかで十分満足していました。

鈴木 作曲をしようと思ったきっかけは、どのようなことがあったのでしょうか。

村治 二〇一二年にアフリカを

訪れたのがきっかけです。NHKの「旅のチカラ」という番組があり、その番組は、出演者が好きな場所に行つて何か新しい経験を一つするという内容でした。音楽活動でなかなか行けない場所はどこだろうと考えて、アフリカに行つてみたいと思ひ、その時の新しい経験として作曲をしました。それまで、作曲はしたことがなかったので、

鈴木 旅がきっかけだったので、すね。「島の記憶」という作品は、副題が「五島列島にて」です。これも旅がきっかけですか。

村治 そうです。日記を書くようにメロディーを書くということが楽しかったので、その後、五島列島に行つたときも、教会を見たときの厳かな気持ちを曲にしたためたり、詩に音楽をつけたりました。そうしてできあがった曲の中から四曲をアルバムに収録しました。

鈴木 これからも作曲は続けていくのでしょうか。

村治 皆さんに、いい曲だなと思つていただけて、機会があれば

ば作曲したいと思います。

鈴木 実は、私も高校生のとき、第二校歌を制定するという機会があり、応募しました。

村治 それは学校の課題だったのですか。

鈴木 いえ、有志が手を挙げて自分たちでつくる形でした。残念ながら、採用されませんでしたけれどもね（笑）。

**ギターという楽器は
とても奥が深い**

鈴木 ギターという楽器についてお話をしたいと思います。私は、最初に近所で買った後、お

小遣いをためて手工ギターを買つたのが本格的なギターとの出会いで、練習を再開した後に欧州の製作者のものを中心に楽器を求めてきました。村治さんは、ホセ・ルイス・ロマニリオス製作のトルナボス（サウンドホール内につけられた木製の円筒）つきの楽器を弾いていましたが、最近、テレビで拝見したときはポール・ジェイコブソンをお使いでした。これは以前使っていた楽器かなと思つたの

ですが。

村治 そうです。デビュー当時に弾いていた楽器です。

鈴木 村治さんの楽器の遍歴はどのような感じでしょうか。

村治 バイオリンと比べると、ギターは求めやすいお値段なので、いろいろと手元に置いて、この曲にはどのギターが合うだろうかと、今度はこれを弾いてみたいという具合に、楽器の変化を楽しめるのがおもしろいですよね。

鈴木 ロマニリオスとジェイコブソンは出てくる音が大分違いますよね。

村治 違いますね。ジェイコブソンは音量がパワフルだったので、東京国際ギターコンクールに出るときに、当時習っていた福田進一先生が勧めてくださいようになりました。その後、もう少し深みのある音を出したいなと思うようになり、別の楽器にしました。でも、不思議なことに、一〇年以上使わなかったジェイコブソンを、四、五年前に弾いたら、ものすごくいい音なんです。以前よりも深み

が出たような感じがしました。人と同じなのかもしれないですけども、たとえずっと弾き込まれていたわけではなくても、時間がたつと少しずつ変わるのでしょうね。それで、最近また使っています。

鈴木 ロマニリヨスは、私も持っていますが、低音が結構太くて、それでいて高音は軽やかに叙情的な味があると感じます。ロマニリヨスの音のどの辺がお好きですか。

村治 今おっしゃったとおりで、低音がちゃんと支えて、高音も細くはなく、輝きのある音です。響きのバランスがよく、どんなジャンルの音楽でもつくりやすいです。例えばスペインのギターは、スペインの作品には合うけれども、ドイツのバッハには味が少し濃過ぎるかなという音色のものもありますよね。でも、ロマニリヨスは気品もあるのでバッハにも対応できて、ホアキン・ロドリーゴ、イサーク・アルベニスなどのスペインの作曲家の作品にも合う、オールマイティーなギターだなと思

います。

鈴木 テレビで拝見した際、トルナボスときの楽器をオーダーされるときに、「ネックを少し細めに」とおっしゃっていた記憶があるのですが、結果的に何ミリぐらい細くなったのですか。

村治 それが細くならなかったんです（笑）。実は、トルナボスも、お願いしたわけではなくて、でき上がってきたらついていていたのです。

ロマニリヨスさんにもお会いしましたけれども、演奏家に寄り添うよりも、製作家としてのプライドがすごくあって、「演奏するよりつくるほうが難しいかもしれない」と、にやつとしながら言われました。そのくらいの気概を持ってつくられているから、芯がある響きを備えた楽器になるのだと思います。

鈴木 ロマニリヨスさんは、ご自分でギターを弾くのですか。

村治 ほとんど弾かないです。**鈴木** 実は、パウリーノ・ベルナベさんの工房を訪ねたことがあるのですが、ベルナベさんもあまり弾けない感じでした。

村治 不思議ですね。製作家の方で達者に演奏する方はあまりいらっしやらないですよ。

鈴木 でも、とてもフランクな人で、工房に何うと、「どれでもいいから好きなように弾きなさい」と言われて、横のほうのスペースで弾かせてくれたりしました。

緊張をいかにして コントロールしていくか

鈴木 村治さんはお父様がギターリストで、三歳からギターを始められていますが、以前テレビ番組で、「食事をやめようと思うことがないように、ギターをやめたいと思ったことはない」とお話しされていました。ギターを続けられる中で、時には好きではなくなってしまうことはなかったのでしょうか。

村治 それはなかったです。けれども、早くからデビューして大人の皆さんとお仕事をしているので、楽しむというよりも、しっかりやらなきゃみたいな気持ちが入り込んで強かったですね。それが強過ぎて、コンサート一



©Takashi Okamoto

つ一つも、楽しむよりも、毎回「頑張ろう」とこなしている感じが途中からありました。そうして何十年も続けていくと、いずれ自分が苦しくなるんじゃないかなど徐々に思い、その後は「いかに楽しめるか」をこつこつと自分なりに追求していくようになりませんでした。

鈴木 私は元銀行員で、プレッシャーのかかる場面もありましたが、仕事をするうちに、徐々に緊張しないようになりました。しかし、趣味でやっているギターでは、発表コンサートがあると、とても緊張することがあります。

村治さんはプロとして大成されているのでコントロールでき

ていると思いますが、コンサートですごく緊張して大変だったということはありませんか。

村治 小さいころから弾いているので、頭が真っ白になるとか、手が震えるとか、冷や汗をかくということは今までなかったです。ただ、緊張すると少し硬くなるので、練習のときには滑らかに動けていたものが、自分の中で少し動きが硬いな、となる感じがありました。

鈴木 ギターは左右の手の動きが客席からよく見えます。私が見られていると気になって体が動かなくなることがあります。

村治 リハーサルをしっかりとやっている、「これだけやったのだから、なるようにしかならない」と思えるようになりますよ。

鈴木 先日、演奏会に参加したのですが、そこでスタンリー・マイヤーズの「カヴァティーナ」とレオ・ブローウエルの「11月のある日」の二曲を弾き、一曲目がスムーズに弾けたので、何とかなるぞと考えながら弾いていたら、途中で先が分からなくな

ってしまいました……。

村治 分かります。ステージの上には魔物がすんでいるんです。

この前、ビリヤードの選手の方とお話をさせていただきましたが、ビリヤードもギターの演奏と少し似たものがあるかなと思えました。相手に心を読まれたりするから、落ちついて、表情にも出してはいけないのだそうです。だから、普段からメンタルを鍛えることが大事だと。私にとっては、音楽家以外のジャンルの人と話すことがすごくいい刺激になります。

先程、お仕事のときは緊張されないと伺いましたが、その秘訣は何でしょうか。

鈴木 例えば数十人が集まっている会議でプレゼンをするとか、緊張が生じそうな場面でも、早い段階からそういう経験を積んでいくと、だんだん大丈夫になります。もちろん緊張はしているのですが、ちゃんと自分をコントロールできるようになるのですよ。

村治 そこは演奏も一緒です

ね。いかに自分をコントロールするかが大事です。私は、「試練は、乗り越えられる者にしか与えられない」という言葉が好きです。何か困難に直面した時には、いつも思い出します。

かけがえのない出会いと 人生の豊かな楽しみ

鈴木 しばらく前までは、年に数カ月間、スペインにおられたのですよね。

村治 スペインには、年に三カ月ぐらい滞在するという生活を四年間繰り返し返しました。あときは楽しかったですね。

鈴木 私はロンドンに四年間勤務しましたが、スペイン人の部

下がマドリッドで働いていたおかげで、年に最低一回はスペインに行けましたし、旅行もしました。

村治 ロンドンからスペインに行く、何だかほっとしませんか。

鈴木 スペインでは夕方近くになると、道端に置いてあるテーブルの上に夕日に当たって少し溶けたような生ハムが載っていたりして、それを食べながら白ワインなんかも飲んでいたり、すごくのどかで、豊かな国だなという感じがします。

村治 私も訪れるまでは、ここまでスペインが好きになるとは思わなかったです。留学はパリ



©Takashi Okamoto



でしたので、マドリードは最先端の街とは少し違うんだろなと思っていました。けれども、行ってみると、時間の流れはゆったりとしていておおらかですし、それこそ人生を楽しもうという気になれるような感じで、すごく影響を受けました。

鈴木 そのスペインで村治さんは、亡くなる少し前の作曲家ロドリゴさんにもお会いになっています。それは、人生の中ですが、振り返ってみていかがですか。

村治 クラシック音楽の場合、演奏している曲の作曲者はほと

んど天国に召された方なので、楽譜と自分の対話という感じになります。しかし、ロドリゴさんとお会いして、どんな名作も、やっぱり人が創ったものなのだなと実感しました。もちろん、今までもそれは分かっていたかもしれませんが、しっかりとそのことを心で感じる事ができました。その時、ロドリゴさんは九七歳でいらっしゃいましたけれども、その人にしかない人生があつて、その中の大切な時間で曲を書かれていて。演奏家は、作曲者の気持ちを代弁したり、推しはかつて表現することが大事だと教わってきましたが、そのことをあらためて感じました。一方で、その出会いを契機に、自分の人生も大事にしようと思うようになりました。

自分のことでさえも全て分かるわけではないのに、その曲を書いた方のことを分かったと思うのはおこがましいので、そのあたりはバランスよく、分かるところまではしっかり学んで、あとは日々の自分の暮らしを大事にしようと思いました。ロド

リゴさん自身、そういう方なんでしょうね。家族に囲まれて、大変なことに遭遇しながらも、人生を一生懸命生きておられた方です。本で読んで感じたところのかもしれないですが、自分が一瞬でもお会いできたことで、後々まで心に残るものが多く得られました。

鈴木 村治さんが以前どこかで、「日常の中で小さな偶然を見つけることが趣味の一つ」と話していたのが印象に残っています。旅やロドリゴさんとの出会いは、人生における偶然の一つということですね。

村治 小さな偶然を見つけたことが好きになったきっかけは、人との出会いは不思議だなと思うようになったことですね。デビューしてどんどん会う人の数が増えて、自分が想像する以上の何かが起きて、出合いや再会があり、自分の思い以外の不思議な何かがあるんだと思うようになりました。

そんな中から、例えば、読みたいなど思っていた本を図書館でほかの人が読んでいるのを目

にするとか、そんな小さなことでもいいのですが、それはきつと神様からの「日常を楽しみなさい」というプレゼントなのだと思いますよ。

鈴木 私も、「日は好日いちこうじつ」や「一期一会いちごころいちごころ」、「莫莫想まくもくそう」や「一隅いちぐうを照らす」といった、一日一日を大切に、いろいろな感動を探すという言葉が好きなので、村治さんのお考えに通じるものを感じます。

村治 旅は予想もしないことが起きます。始まりがあつたら終わりがあり、人生のようなものだなとも感じます。だから、旅をしているような感じで日常を過ごせば、より刺激的に豊かに過ごせるかなと思っています。もちろん、さまざまな出会いも大切にしたいです。

鈴木 こうやってお会いすることができてよかったです。

村治 今年は新しいアルバムを制作する予定があり、曲も決まっています、どんなふうアレンジするか相談中です。

鈴木 楽しみにしています。本日はありがとうございました。



日本銀行のレポートから

日本銀行は、1月、4月、7月および10月の政策委員会・金融政策決定会合において、先行きの経済・物価見通しや上振れ・下振れ要因を詳しく点検し、そのもとでの金融政策運営の考え方を整理した「経済・物価情勢の展望」（展望レポート）を決定し、公表しています。本稿では、2018年4月の展望レポート（基本的見解は4月27日公表、背景説明を含む全文は4月28日公表）のポイントを解説します。

*全文は日本銀行ホームページに掲載されています。http://www.boj.or.jp/mopo/outlook/index.htm/

「経済・物価情勢の展望」（展望レポート）

— 二〇一八年四月 —

二〇一八～二〇二〇年度の 中心的な見通し（図表1・2）

【景気】

二〇一八年度は、海外経済が着実な成長を続けるもとで、きわめて緩和的な金融環境や政府支出による下支えなどを背景に、潜在成長率を上回る成長を続けると思われる。

二〇一九年度から二〇二〇年度にかけては、設備投資の循環的な減速や消費税率引き上げの影響を背景に、成長ペースは鈍化するものの、外需に支えられて、景気の拡大基調が続くと見込まれる。

【物価】

消費者物価（除く生鮮食品）

の前年比は、企業の賃金・価格設定スタンスがなお慎重なものにとどまっていることなどを背景に、エネルギー価格の影響を除いてみると、景気の拡大や労働需給の引き締まりに比べて、弱めの動きが続いている。もっとも、マクロ的な需給ギャップが改善を続けるもとで、企業の賃金・価格設定スタンスが次第に積極化し、中長期的な予想物価上昇率も高まるとみられる。この結果、消費者物価の前年比は、プラス幅の拡大基調を続け、

二％に向けて上昇率を高めていくと考えられる。

リスクバランス

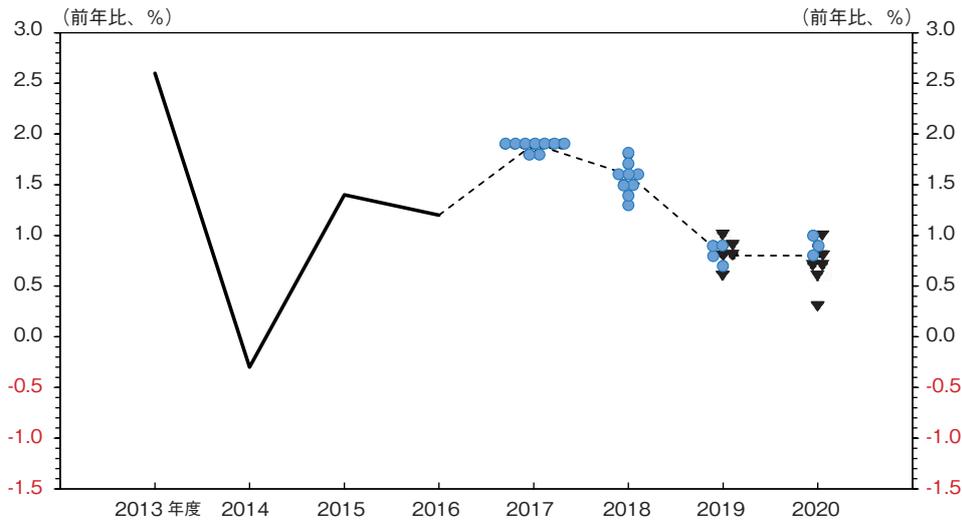
経済については、二〇一八年度は概ね上下にバランスしているが、二〇一九年度以降は下振れリスクの方が大きい。物価については、下振れリスクの方が大きい。物価面では、二％の「物価安定の目標」に向けたモメンタムは維持されているが、なお力強さに欠けており、引き続き注意深く点検していく必要がある。

金融政策運営

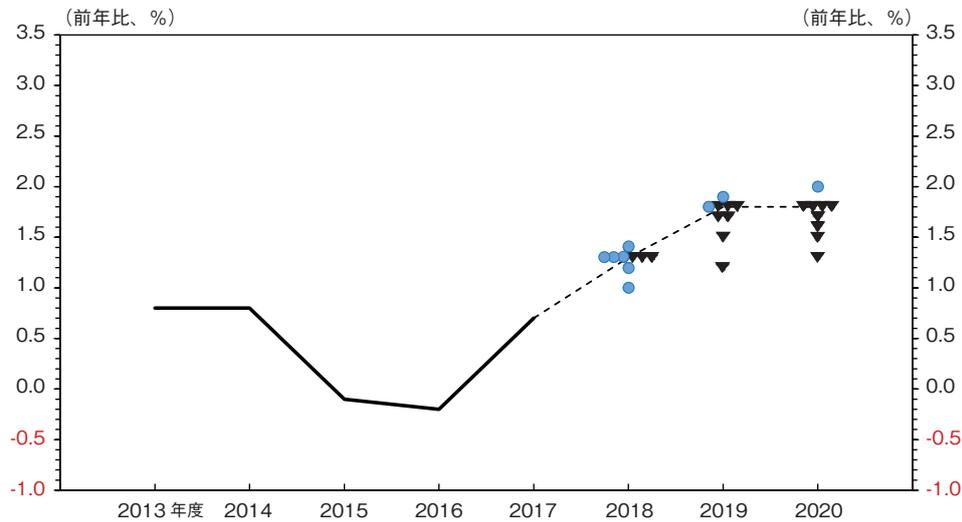
二％の「物価安定の目標」の実現を目指し、これを安定的に

図表1 政策委員の経済・物価見通しとリスク評価

(1) 実質 GDP



(2) 消費者物価指数 (除く生鮮食品)



(注1) 実線は実績値、点線は政策委員見通しの中央値を示す。

(注2) ●、△、▼は、各政策委員が最も蓋然性が高いと考える見通しの数値を示すとともに、その形状で各政策委員が考えるリスクバランスを示している。●は「リスクは概ね上下にバランスしている」、△は「上振れリスクが大きい」、▼は「下振れリスクが大きい」と各政策委員が考えていることを示している。

(注3) 消費者物価指数 (除く生鮮食品) は、消費税率引き上げの直接的な影響を除いたベース。

図表2 政策委員見通しの中央値

(対前年度比、%)

	実質 GDP	消費者物価指数 (除く生鮮食品)	消費税率引き上げの 影響を除くケース
2017年度	+ 1.9	+ 0.7	
(1月時点の見通し)	(+ 1.9)	(+ 0.8)	
2018年度	+ 1.6	+ 1.3	
(1月時点の見通し)	(+ 1.4)	(+ 1.4)	
2019年度	+ 0.8	+ 2.3	+ 1.8
(1月時点の見通し)	(+ 0.7)	(+ 2.3)	(+ 1.8)
2020年度	+ 0.8	+ 2.3	+ 1.8

(注)

消費税率については、2019年10月に10%に引き上げられる(軽減税率については、酒類と外食を除く飲食料品および新聞に適用される)ことを前提としている。なお、教育無償化政策の影響については、統計上の取り扱いが未定ということもあり、消費者物価指数には反映されないと仮定している一方、実質GDPの見通しについては、現時点の情報をもとにその影響を織り込んでいる。

持続するために必要な時点まで、「長短金利操作付き量的・質的金融緩和」を継続する。消費

者物価指数(除く生鮮食品)の前年比上昇率の実績値が安定的に二%を超えるまで、マネタ

リーベースの拡大方針を継続する。今後とも、経済・物価・金融情勢を踏まえ、「物価安定の目

標」に向けたモメンタムを維持するため、必要な政策の調整を行う。



日本銀行のレポートから

日本銀行は、わが国金融システムの安定性について包括的な分析・評価を示し、金融システムの安定確保に向けて関係者とのコミュニケーションを深めることを目的に『金融システムレポート』を年2回作成・公表しています。『金融システムレポート』の分析結果については、金融システムの安定確保のための施策立案や、モニタリング・考査を通じた個別金融機関への指導・助言に活用しています。また、国際的な規制・監督の議論にも活かしています。金融政策においても、マクロ的な金融システムの安定性評価は、中長期的な視点も含めた経済・物価動向のリスク評価を行ううえで重要な要素のひとつとなっています。

*全文は日本銀行ホームページに掲載されています。http://www.boj.or.jp/research/brp/fsr/index.htm/

「金融システムレポート」

二〇一八年四月

二〇一八年四月号の 特徴と問題意識

今回のレポートでは、金融機関が近年積極化させている貸出について、特に金利と信用リスクの関係に焦点を当てている。世界的な低金利環境が続くなか、社債などのクレジット市場では、多くの先進国において信用スプレッドが歴史的な低水準にまで縮小し、投資家によるリスク認識の緩みやリスクのリプライシング（再評価）に関する懸念が指摘されるようになってきている。これと似た事象や問題が銀行貸出市場でも起きていないかというのが、今回の問題意識である。

景気改善が長く続き、企業のデフォルト率が低下した結果、金融機関の信用コストは既往最低水準で推移している。しかし、信用コストの

算出が過去のデフォルト率に基づいている場合、経済のボラティリティが低下した局面が長く続くと、金融機関が潜在的に抱えている信用リスク量を過少に評価してしまう可能性がある。金融機関が十分なリスク耐性を備えているかどうかをみるには、将来起こり得るマクロ経済環境の悪化に対して、企業財務がどのように変化し、ひいては金融機関の損失吸収力にどのような影響が及び得るか検証しておくことが重要となる。企業の信用リスクは、財務内容の違いを反映し、ばらつきも大きいため、金融機関はそれぞれの企業の信用リスクに見合った貸出金利を設定する必要がある。その重要性は、ミドルリスク企業向け貸出に注力する金融機関が近年増えていることを踏まえると、一層高まっているといえ

る。そこで、今回のレポートでは、ミドルリスク企業を中心に、その財務内容や行動特性を明らかにするとともに、それらに対する金融機関の（金利設定を含む）融資スタンスとリスク耐性について掘り下げた分析を行う。そのうえで、金融システムの潜在的な脆弱性に関する評価を行い、金融機関の信用リスク管理の課題等について指摘する。要旨は以下のとおり。

金融仲介の 現状と金融循環の評価

日本銀行の金融緩和を背景に、金融仲介活動は引き続き積極的な状況にあり、景気の緩やかな拡大を支えている。国内貸出市場では、貸出金利が長短ともに既往ボトム圏で推移し、残高は前年比二％程度のペース

て、資本と流動性の両面で相応の耐性を備えており、全体として、わが

国の金融システムは安定性を維持していると判断される。もともと、金融機関のストレス耐性についてはばらつきがあるほか、金融取引需要を規定する人口や企業数が継続的に減少するという慢性ストレスを考慮すると、現時点の資本の十分性は、将来の金融システムの安定を必ずしも保証する訳ではない。リーマンショックのような急性ストレスに対する損失吸収力があっても、慢性ストレスによって金融機関の基礎的収益力が下押しされる場合には、いずれ自己資本が毀損される状況に至る可能性があるためである。地域金融機関の中には、コア業務純益が減少するなかで、当期純利益の水準や高い配当性を維持するために、有価証券の益出しを行う先も相応にみられる(図表3)。無理な益出しの継続は、有価証券の利息・配当収益を減少させるほか、有価証券の含み益は、経済価値ベースでは資本バッファーとして機能する面があることから、株主還元のある方も含め、収益配分

について検討を進めていくことが重要である。

金融機関の信用面の リスクテイクに伴う脆弱性

慢性ストレス下での貸出競争の激化や金融緩和の影響から、金融機関は、いわゆる「ミドルリスク企業」向けを中心に、低利による貸出を積極化させている(図表4)。こうした動きの背景には、ミドルリスク企業は、優良企業に比べ内部資金が少なく借入の金利感応度が高いため、金融機関が低金利を提示すれば、潜在的な借入需要が顕在化しやすいことがある(図表5)。ミドルリスク企業向け貸出の増加は、自己資本比率が高く、リスクテイク能力が相対的に高い金融機関で生じているが、同時に、基礎的収益力が低く、リスクテイクのインセンティブが相対的に強い金融機関で生じている傾向がある。景気改善と低金利という良好なマクロ経済環境が長期化しているため、金融機関による信用リスクの評価は緩む傾向がみられる。金融機関や企業が良好なマクロ経済環境の継

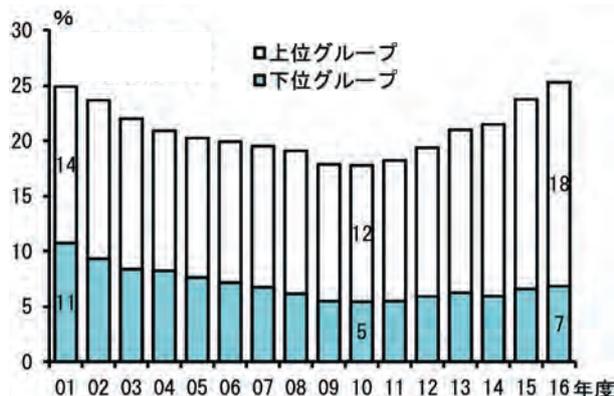
続を前提に行動するようになると、マクロ経済環境が反転した際に、予想外の損失からバランスシートを毀損する可能性も考えられる。金融機関の正常先債権全体の引当率は、リーマンショック前を下回る既往最低水準で推移しているが(図表6)、景気悪化や金利上昇など負のショックが発生した場合、収益性や借入返済能力の低いミドルリスク企業を中心にランクダウンが発生し、信用コストが急激に上昇する可能性も考えられる。

マクロプルーデンスの 視点からみた金融機関の課題

金融機関が収益維持の観点から過度なリスクテイクに向かうことになれば、金融面の不均衡が蓄積する可能性がある一方で、基礎的収益力の低下が続き損失吸収力も失われれば、金融仲介機能が低下する可能性がある。こうした過熱・停滞両方向のリスクがあるなかで、金融システムが将来にわたって安定性を維持していくためには、金融機関は、持続性の高い収益の確保に向けた取り組み

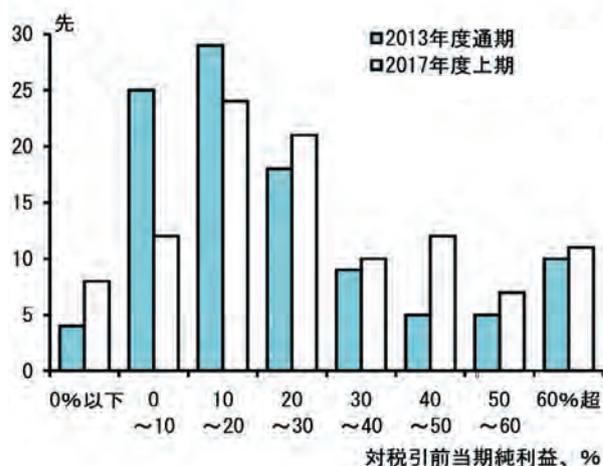
みを加速するとともに、内外貸出や株式・外債などへの投資といった積極的にリスクテイクを進めている分野においてリスク対応力を強化することが重要である。この点、ミドルリスク貸出を積極化させている金融機関は、先行きのマクロ経済環境の変化も念頭に置いて、リスクに応じた適正な金利設定を行うとともに、引当の適切性を検証するなど信用リスク管理の実効性を向上させていく必要がある。特に、貸出債権の引当にあたっては、足もとの良好なマクロ経済環境に過度に引き摺られることのないよう、中長期的な視点から循環的な影響を十分に勘案する必要がある(図表7)。同時に、金融機関は、顧客企業とのリレーションシップを強化し、企業の生産性向上を積極的に支援していくことが望まれる。日本銀行としても、考査・モニタリング等を通じてこれらの金融機関の取り組みを後押しするとともに、マクロプルーデンスの視点から、金融機関による多様なリスクテイクが金融システムに及ぼす影響について引き続き注視していく。

図表4 低採算先貸出比率



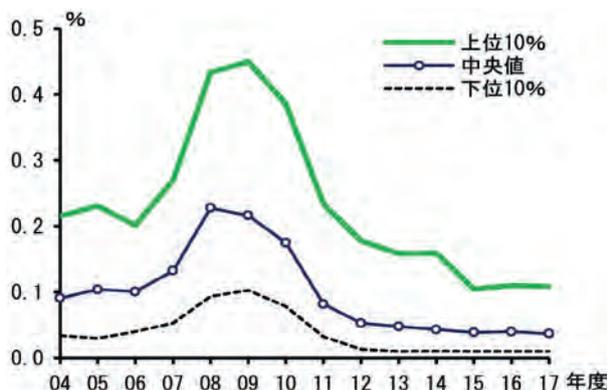
(注) 「低採算先」とは、財務内容の相対的に悪い貸出先企業のうち、銀行が貸出金利の水準を信用リスク対比で低めに設定している先を指す。低採算先の中でも相対的に財務内容が下位に位置する企業を「下位グループ」、残りを「上位グループ」に分類している。
(資料) 帝国データバンク

図表3 当期純利益に占める有価証券関係損益の分布



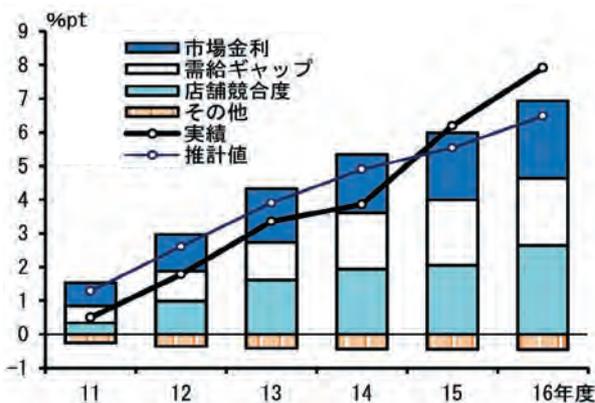
(注) 1. 有価証券関係損益は、投資信託解約損益を含む。
2. 集計対象は地域銀行。
(資料) 日本銀行

図表6 正常先債権の引当率



(注) 1. 正常先債権残高に対する正常先の一般貸倒引当金の比率。
2. 集計対象は地域銀行。直近は2017年9月末。
(資料) 日本銀行

図表5 低採算先貸出比率の要因分解



(注) 金融機関別にみた低採算先貸出比率を被説明変数とし、市場金利、店舗競合度、需給ギャップを説明変数とするパネル推計の結果をもとに、2010年度以降の低採算先貸出比率の累積変化を寄与度分解したもの。

図表7 引当率の算定期間

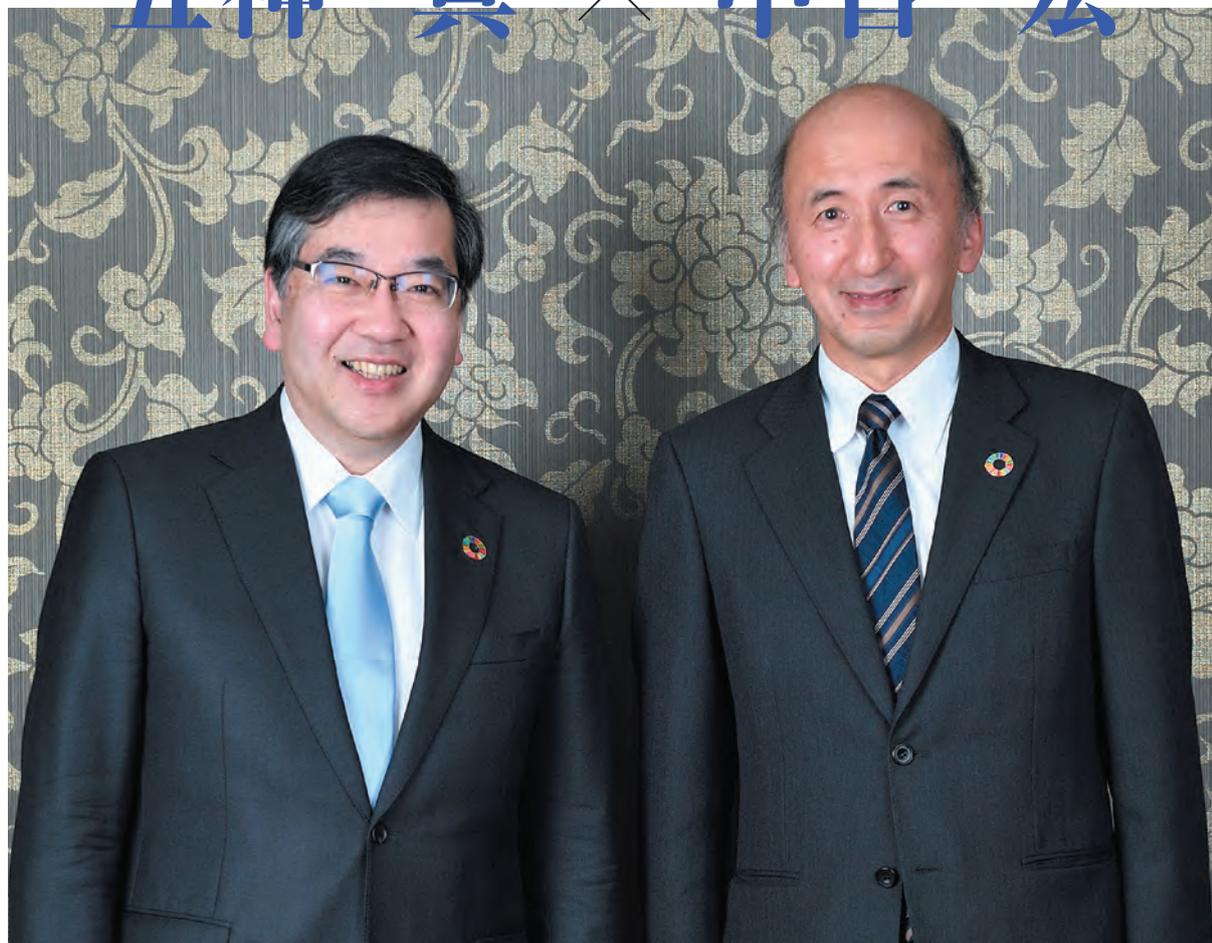


(注) 各調査時点における、正常先の引当率算出にかかる総算定期間 (全ての算定期間の合計)。
(資料) 日本銀行

東京大学総長

日本銀行前副総裁

五神 真 × 中曾 宏



「知の協創」の拠点として 大学が社会変革を駆動する

産業・社会構造が急速に変わりつつある今、
日本の大学はどのような役割を果たすべきか——。

大学の機能の大胆な転換を提唱する

「東京大学ビジョン2020」を掲げた五神真総長と、中曾宏前副総裁が語り合った。

近年の大学の課題を踏まえ、欧米の大学とは異なる、
学知の蓄積を最大限に生かした日本独自の大学の在り方を模索する。

司会 鶴海誠一

日本銀行情報サービス局長（取材当時）

写真 野瀬勝一

「公共性」に向けて

鶴海 東京大学（以下、東大）では国立大学法人化を見据えた二〇〇三年、「東京大学憲章」が制定され、そこで「世界の公共性に奉仕する大学」との決意が示されました。また五神総長が一五年に打ち出された「東京大学ビジョン二〇二〇」においても、「二一世紀の地球社会における公共性の構築」をその一つに掲げています。ここで共通する「公共性」の大学における意味合いについて、総長のお考えをお聞かせください。

五神 大学は「知の公共財」であると考えています。長い年月をかけて積み上げられてきた学問、すなわち知の蓄積は皆に共有されるべきものです。したがって大学は皆が支え、皆がそこから恩恵を享受する存在であるべきです。東大は二〇一七年、創立一四〇周年を迎えました。「公共」の定義はその時代ごとに違っていたかも

しませんが、多くの他者に対して奉仕するという、東京大学憲章に掲げる理念は一貫していると思います。

東大の一四〇年の歴史の中間点は、第二次大戦の終戦でした。終戦を挟むと、前半の七〇年は明治維新後の日本が近代国家をどのようにに建設するかという時期。そこで生まれた学問は、西洋の知を輸入し模倣したもののだけではありません。東洋と西洋の異なる学問を融合し、独自の新しい知を創出してきました。創立からわずか十数年の間に、世界にアピールできるレベルの優れた研究成果が様々な分野で生み出されました。

終戦を挟んで後半の七〇年、すなわち戦後の東大は、日本の復興と平和な社会の構築に貢献してきました。そして、これから迎える次の「第三の七〇年」では、東大は人類社会をより良いものにするために貢献するべきだと考えています。次の七〇年は変

化のスピードがこれまでとは全く違うと思います。国立大学は二〇〇四年から国立大学法人になりましたが、社会変革の駆動力となるために、その機能を一層強化しなければなりません。一方、国の厳しい財政状況を踏まえると、大学の運営を税金のみで支えるスキームは成り立ちません。交通インフラや社会保障と同様に、公共財である国立大学を誰がどのように支えていくべきか。大学の知を社会にもっと活用してもらい、社会全体からの投資を引き付けることで大学に資金を循環させる仕組みが必要です。東大がそのモデルを提示していかなくてはならないと考えています。

中曾 大変有益な座標軸を提供していただきました。日本銀行（以下、日銀）の創立は一八八二（明治一五）年、二〇一八年で一三六周年と、東大とほぼ同じ期間、わが国の中央銀行として業務を遂行してきました。大学が人材を供給する側とすれば、日銀は日本の

経済政策を担う機関の一つとして人材を受け入れる側になります。そこで求められる人材像は戦前の七〇年から戦後の七〇年で変化し、第三の七〇年においてはさらに変化していくと思います。

第三の七〇年における日本の生き方として、経済や金融のグローバル化は与件です。そして、日本は、その中に自らをしっかりと組み込んだうえで、国際社会の責任ある一員として役割を果たしつつ、安定と繁栄を果たしていかなければなりません。

そうした環境下で求められるのは、やはり「公共性」を備えた人材です。では、公共性とは何か。一つは異なる価値観を受け入れる多様性（ダイバーシティ）です。それから自己を相対化できる視野。そのうえで知の力を武器として磨かれた先見性をもって組織や社会を目指す方向へ誘導していく、そういう能力を持つ人が公共性ある人材だと思います。

そのような人材を日銀という

公的機関に引きつけて見ると、時代の变化に即応していけるだけの先見性と同時に、五神総長の言葉をお借りすると、多くの他者に対して奉仕するという、いつの時代にも普遍的に求められる「公共性」も兼ね備えている必要があります。具体的には、時には自己犠牲さえも厭わ^{いと}ない強い使命感や、公正に職務を遂行する高いモラルを具備していることです。「国民経済の健全な発展に資する」という日銀の理念に基づき、物価の安定を図り、金融システムの安定を確保するという公益を実現するために、今日的なワークライフ

バランスに立脚する価値観とは時に相反するような行動が求められることもあるでしょう。これからの時代で求められる先見性と普遍性が複合された「公共性」を持つ人材をどのように育成し、定着させるか。副総裁を務めた五年間、日銀の組織運営を預かる者として、私自身、いつも真剣に考えてきたことです。

多様性を尊重できる グローバル人材が必要だ

鶴海 需要側のこうした要望に対して、大学としてはどのように考えられていますか。

五神 世界の課題がますます複雑化してきている中、人類社会全体をより良くするために貢献できる人材が求められています。より良い社会づくりには、まずは前提として自由で民主的な社会システムであることが必要です。つまり、個々の人たちが自由な発想で意欲を持って活動しながら、社会全体としても調和的な発展ができる、そういう仕組みを構築し世界で共有することが重要です。これは自然に任せていては実現できません。こうした仕組みを、国境を越え、連帯して実現するやり方を考えなければなりません。そのためには人々が多様な知恵を組み合わせ、協力することが不可欠です。このことを象徴するのが「グローバル化」という言葉のとらえ

方の変化です。私が高校生の頃(約四五年前)は、日本は島国だから外に出ていこうという意味で「国際化」という言葉が盛んに使われていたと記憶しています。その後

グローバル化という言葉が使われはじめましたが、最初は欧米とのフラット化に近いニュアンスで、欧米先進国の科学技術によつて実現された質の高い暮らしを途上国にも広げていこう、それが良いことだとという意味合いでした。しかし、今、フラット化は私たちが求める社会の姿ではありません。むしろ、世界中の多様な文化・思想・言語・経済などを協調させ、それぞれの強みを組み合わせることが、人々の幸せにつながり、人類社会をより強靱なものにするのだということに、多くの人が気づいてきたのです。それに伴い、「グローバル化」のとらえ方も、より多様性を尊重するものへと変わってきたと思います。そこで、自分が他者とどう異なるかを認識することや、自分とは異なる他者に対

して真の共感を広げる力がますます重要になってきています。

一方で、東大の学生の最近の傾向をみると、多様性の面で課題を感じます。例えば学部では首都圏出身者が多く、女子学生の比率も上がっています。そこで、東大ではある種「とんがった」力や意欲を持った学生に受験を促すために推薦入試を導入したり、女子学生向けの住まい支援を行ったり、留学生を積極的に受け入れたりするなどの取り組みを通して学生構成の多様化を進めています。また、多様な人々と接する機会を増やすため、理系・文系、専門分野を超えた交流や日本人学生と留学生との積極的な交流を学生に勧めています。世界の多様な人々と共に生き、共に働く力を学生に鍛えてもらうため、今年度からは新たに「国際総合力認定制度」(Global Gateway)を設けました。東大の学生には、自分と異なる人々との交流を通じて自己を相対化し、多様性を尊重する



このかみ・まこと ● 1976年私立武蔵高等学校卒業。80年東京大学理学部物理学科卒業。85年理学博士。98年同大学院工学系研究科教授、2010年同大学院理学系研究科教授、14年同大学院理学系研究科長・理学部長を経て、15年より第30代東京大学総長。専門分野は光量子物理学。現在、未来投資会議議員、中央教育審議会委員、産業構造審議会委員、日本学術会議会員等を務める。著書に「変革を駆動する大学——社会との連携から協創へ」(東京大学出版会)がある。

姿勢を身につけてほしい。そのようなメッセージをいつも伝えていきます。

中曾 職業人の眼からも、時代の要請は「国際化」から「グローバル化」へと変化しているように思います。私としては、グローバル人材たる要件が四つあると考えており、その第一はまさに「われわれは皆、違うのだ」ということを与件として、多様性を前提に日本

の立ち位置をその中で考える能力があることです。

第二は、職業人の立場で十分な実務能力を有することです。中央銀行の世界で言えば、経済学や金融論の共通基盤に立脚した実務知識を持つことが大切です。そして、第三はコミュニケーション能力。日銀であれば、各国当局のほか内外のメディアや学界と意思疎通ができる、こういう能力も現代世界

においては大事だと思います。

そして第四は、判断が公正で議論が誠実であること。その能力や姿勢が国際社会では尊敬を集め、リーダーシップを発揮している前提になります。これらがグローバル人材に必要な資質であり、多様性の尊重は、前提中の前提なのです。

鶴海 グローバル人材に必要な四つの能力、さらには「公共性」を具備した人材について、ご経験に即してより具体的にお話しいただけますか。

中曾 二〇〇八年に生じたリーマンショックへの対応に向けて各国中央銀行と取り組む中で、今お話しした点を痛感しました。主要国の中央銀行と連携して、国際金融危機により生じた世界的な米ドル資金の不足に対応するため、「スワップライン」と呼ばれる新しい米ドル供給策が生み出されました。非常に短期間でこの仕組みをつくり上げるため、各国の実務担当者は一晩中、電話をつなぎつ放

しにしながら、口頭了解で細部を詰めていきました。通常なら文書を作成し、協定を締結しなければならぬところですが、危機対応は時間との戦いなのでその余裕はありませんでした。

こうした対応が可能であったのは、やはり各国の中央銀行の担当者たちが共通の実務知識を有し、しかも日頃から相互信頼関係を築いてきたからです。なおかつ各国の経済・金融システムの多様性や制度的相違も十分認識したうえで有効な議論ができたことが、大きな決め手になったと思っています。

五神 リーマンショック直後の危機に対する国際的な緊急対応は、想像を絶するものだったのでないでしょうか。ただ、現在はそれ以上の危機がいつ起こってもおかしくないと思うのです。おっしゃるように一〇年前は、日米欧の中央銀行コミュニケーションにおける信頼関係に基づく連帯と、情報交換や議論が有効でした。しかし、グ



なかそ・ひろし ● 1973年私立武蔵高等学校卒業。78年東京大学経済学部卒業後、日本銀行入行。97年信用機構局信用機構課長、2000年国際決済銀行へ転出、01年金融市場局兼国際局参事役、03年金融市場局長、08年日本銀行理事、13年3月日本銀行副総裁、18年3月日本銀行副総裁を退任。

ローバル化が進んだ結果、プレーヤーを含めて今の世界はその当時よりも多様になっています。次の危機的な状況が起こったら、リーマンの時の対応を教訓にしたうえで、それを現代的にアップグレードしなければなりません。そこでは、中曾さんが提示されたグローバル人材が中央銀行コミュニティ以外にも多く必要になると思われま

す。一方で、日本にそうした人材が十分であるかと問われれば、現状、不足していると言わざるを得ません。

社会貢献意識の高い東大生が増えている

中曾 未来の危機を予見することはできませんが、リーマンショックと同等以上の世界的な拡がりを持つかもしれない。そのとき日本は、対応力のある人材が輩出さ

れていないと問題に対処できず、国際社会でのリーダーシップも発揮し難いでしょう。では、現在不足していると総長が述べられている背景として日本の教育における課題は何でしょうか。

五神 変化が極めて激しい時代への対応力を身につけるうえで、むしろ「変えてはならない部分」をきちんと理解するという意味で、ベースとなる知性の盤石さが従来以上に問われることになりま

す。論理的にものを考える力、議論する力、あるいは「自分の知らないものがある」ということを受け入れる視野の広さと精神力。大学はこうした知性の足腰を鍛える場です。しかし、そのための準備が整っていないまま入学する学生も増えています。私達が通っていた高校は、旧制高校の流れを汲むリベラルアーツ教育があり、高校生たちは背伸びするようにそれに食らいついていました。現在の高校や大学の多くがそういう教育環境を許容する余裕を失っていま

す。東大の強みは多くの大学で廃止された教養学部を今も維持していることです。しかし、そこでの授業も大教室での講義が少なくありません。常時二〇〇〜四〇〇人程度で学んだ私の高校時代の環境とは違います。いかに主体的に学ぶ力を身につけさせるか工夫が必要です。

学生の学びの姿勢が変わった原因の一つに入試があります。優秀な学生を集めることは大学の活動の質を高めるために極めて重要です。東大では毎年、大きなエネルギーを注いで問題作成や採点に工夫を凝らしています。しかし、入試は資源や時間の制約がある中で行うものです。その限界の中で、本来大学が求める「考える力」が十分備わっていないのに、形式的なトレーニングによって合格する学生もいる。そこでテクニクを得るための受験対策が産業化します。結果、入試は教育システムの一つの通過点でしかないにもかかわらず、教育システム全体に大き

な影響を与えてしまっています。さらに受験対策に時間を割きすぎため、リベラルアーツ教育のよいうな「余裕」を許容する度合いが低下してしまっていると思います。

一方で、今の学生たちには良いトレンドも見られます。たとえば「あなたが大学で学ぶ理由は何ですか」と問うと、「社会に役立つ人になりたいからです」と真正面から答える。社会課題の解決に意欲を持つ学生がものすごく増えています。この世代の学生たちは中学・高校時代に東日本大震災を経験し、社会意識の変容を感じてきました。東大は震災直後から復興支援の活動を続けており、多くの学生が自身の問題に取り組みむような姿勢で参加しています。自分と異なる他者について考えるという意味では、復興支援を通じて東京と地方の問題を考えることは、日本と世界の問題を考える視点にもつながります。学生の意識は確実に変わってきています。

鶴海 東京大学ビジョン二〇二〇では、公共的な視点から主体的に活動し新たな価値創造に挑む「知のプロフェッショナル」の育成も掲げられています。

五神 学部教育では「知のプロフェッショナル」として必要な基礎力を涵養して、多様な人々と共に働けるように国際感覚も鍛えられます。東大には平均値から全く外れた、極めて能力の高い学生もいるので、「出る杭」を伸ばす仕組みも必要です。新しいことに挑戦しようという学生を勇気づけたい。変化はチャンスだ、積極的に捉えて大いに楽しみなさいと、入学式や卒業式では強調しています。

大学を「知識産業化」して 全世代の協創で価値を生む

五神 「デジタル革命後の未来に備え、子供にはプログラミングや英会話を身につけさせる教育が必要だ」といった議論を耳にします。しかし、若い世代だけに「未来の時代を支える準備をしてくだ

さい」と言うのは、極めて理不尽だと思います。二五年には団塊世代が七五歳を超え後期高齢者となり、三〇年には八〇歳を超えます。今の社会のままでは、その頃に労働力の核となっている団塊ジュニア世代の多くが介護離職してしまわうでしょう。日本の持続的な成長のためには働き方を含めて社会システムを大きく変化させなければなりません。それを担うのは、今の子供たちだけではない、私や中曾さんの世代も含めた全員なのです。上の世代こそ新しいことに

チャレンジし、その姿を若い世代に見せ、かつ彼らの背中を押さなくてはなりません。ただ、日本ではチャレンジを資金面で支援する仕組みが極端に弱い。これは深刻な問題です。リスク投資の文化がなさすぎると思います。東大には様々な企業から多くの寄付や共同研究といった「投資」をいただいています。その規模は、欧米や中国、韓国の主要大学と比べると小さいのです。

中曾 日本でリスク投資の文化が衰退した経緯を振り返ると、始まりは九〇年代の金融危機です。ここで銀行セクターが機能不全に陥り、投資どころか融資も増やしていく状態になり、以後長い経済の停滞——デフレが続くことになりました。デフレ下ではキャッシュ（お金）の価値が上昇していくので、企業にとっては、投資よりも現預金を積み上げる誘因が大きくなる。さらに、二一世紀に入ると少子高齢化が進み、人口減少が始まった。

こういう状況の中で企業のアンマールスピリットが萎えていききました。もともと投資に保守的な国民も、金融危機を経て、お金を投資よりも貯蓄に回そうという意識がさらに強くなった。こうして経済から活力が失われていったのだと思います。

では、日本の産業を再び活性化するためには、どのような視点が必要でしょうか。

五神 日本は、労働集約型から資

本集約型へと産業を転換し、工業立国の強みを発揮して戦後の復興と成長を遂げました。その産業構造がデジタル革命とともに急速に変わろうとしています。あらゆる産業にICTが組み込まれるようになれば、いかにデータを利活用できるかが成功のカギです。これからは価値の源泉がモノから知や情報に変わり、知識集約型産業が経済の中心になると考えられるのです。

問題は、知識集約型産業への転換が、様々な格差を解消し、皆が活躍できるインクルーシブな社会を実現するというグッドシナリオもあれば、強者がデータを独占し格差がますます拡大する「デジタル専制主義」とでも呼ぶべき社会へと行き着くバッドシナリオもあり得ることです。私たちは今、その分水嶺に立っており、強い意志を持ってグッドシナリオを選び取っていかねばなりません。

資本集約型から知識集約型へ産業が転換すれば、産業の成長モ

デルも変わります。知識集約型産業においては、経営者はビジョンを描き、それに対して投資を集めることが重要になります。かつて資本集約型産業の時代、企業は成長のためにどんな研究開発をするか、何に投資すればいいかというロードマップがはつきり見えていました。今はそれがありません。社会の変化が激しく長期ビジョンが描きにくい。産業界の方々は、次の成長のためにどこに投資をすればいいか悩まれています。

そこで東大は、産業界と一緒に長期ビジョンを描くところから議論し、未来への投資ができるように東大の持つ様々な知恵を提供することを始めています。インクルーシブな社会の実現に向け、東大の知的資産と企業の経営資源の融合を図りながら、組織対組織のレベルで、皆で知恵を絞りましょうということなのです。日本の企業では私たちが大切に育てた優秀な卒業生が多く働いています。だから強い信頼感のもとで連携できるの

です。こうした新しい産学連携を「産学協創」と呼んでいます。

鶴海 東大では〇四年にUTEC（東京大学エッジキャピタル）というベンチャーキャピタル（VC）を設立され、その後、様々なベンチャー支援の結果、東大から三〇〇社以上の関連ベンチャー企業が生まれています。

五神 UTECは東大の研究成果を価値創造につなげる技術移転関連事業者です。日本の大学発ベンチャー企業を育てるVCの先駆けで、支援したベンチャー企業の中には有名な企業もいくつかです。一方、一二年の補正予算事業で、大学と連携したVCを新たに設立する為の基金が創設されました。私が一五年に総長に就任した時点で、既に四大学（東北大・東大・京大・阪大）に国から出資がされており、東大でも新たなVCを設立することが決まっています。しかしUTECの活動も軌道に乗っていったので、東大で新たな官製のVCを作ることは、



鶴海誠一 日本銀行情報サービス局長（取材当時）

民業圧迫になってしまふのではと心配になりました。そこで、まず状況を調べてみました。するとすでに二二〇以上の関連ベンチャー企業が立ち上がっており、さらにそれを支援するVCやエンジェルはUTECをはじめ四〇社以上になっっていることがわかりました。東大周辺にはベンチャー育成のエコシステムが根付き始めていたのです。それを東大が邪魔するようなことは避けなければなりません。そう考えて総長就任直後に大幅な設計変更を指示し、一六年に東京大学協創プラットフォーム開

発株式会社を設立しました。そして、特定の分野に知見を持った多様なVCと提携しながら、東大の強みを活かす戦略的な投資を行いVCの強化育成にも役立つ「ファウンドオブファンズ」という新たな仕組みを導入しました。さらに、カーブアウトベンチャー(注)の創出を支援する仕組みも付け加えることを準備しています。日本では、企業の知財、技術、人材が、ビジネスモデルに合わないために「死蔵」されているケースが少なくありません。このプランは、それらを企業本体から切り出して事業開発や起業をする際の支援をするというものです。日本ならではのニーズに応えるモデルです。

私は自分の研究室から一〇〇人ほどの卒業生を送り出し、そのうち七割が産業界に行きました。益暮れに集まって話を聞くと、企業の中で彼らの能力が最大限に生かされていないと感ずることが増えています。しかし日本の場合、転職は大きなリスクでもありません。そこで、彼らを最もよく知る身としては、もっと彼らの潜在力を引き出す方法があるはずだと思ひ、このモデルを導入したのです。

中曾 産学協創の考え方は日本型の対応とも言え、産と学の新しい連携の仕方でもあると思います。それをどうやって大学と企業において実現するか。たとえば、大学から産業界に行つて知識を集積してきた人材を、もう一度大学教育に呼び込むことで産学協創を促していくことができるのではないのでしょうか。

五神 東西両洋の学術を融合しながら独自の学問を創り上げてきた日本の大学には、知識集約型産業を駆動するための仕組みに必要なものがそろっています。これまでの日本の大学は、人材を送り出す発射台の役割だけを担っていたばすみしました。これからは、卒業生を含め社会の様々な場面で活躍する人々が社会と大学の間を行き来出来るよう、大学も全世代に新しい学びを提供するリカレント教育

(注) カーブアウトベンチャー／企業が事業の一部を切り出して、その事業を社外事業の一つとして独立させるベンチャーの一形態。



【副総裁】

雨宮正佳

[あまみや・まさよし]
昭和30年9月30日生
出身地 東京都

- 昭和 54.3 東京大学経済学部卒業
54.4 日本銀行入行
平成 10.4 企画室企画第2課長
10.7 金融市場局金融市場課長
11.5 企画室企画第1課長
13.4 企画室参事役
14.6 考査局参事役
16.7 政策委員会室審議役（組織運営調整）
18.4 企画局長
22.6 日本銀行理事
24.5 日本銀行理事 大阪支店長囑託
25.3 日本銀行理事 大阪支店長囑託を解く
26.6 日本銀行理事<再任>
30.3 日本銀行副総裁
-



【副総裁】

若田部昌澄

[わかたべ・まさずみ]
昭和40年2月26日生
出身地 神奈川県

- 昭和 62.3 早稲田大学政治経済学部経済学科卒業
平成 2.3 早稲田大学大学院経済学研究科修士課程修了
3.4 早稲田大学政治経済学部助手
6.6 トロント大学経済学大学院修士課程修了
10.3 早稲田大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学
10.4 早稲田大学政治経済学部専任講師
12.4 早稲田大学政治経済学部助教授
14.8 トロント大学経済学大学院博士課程単位取得退学
17.4 早稲田大学政治経済学術院教授
29.3 コロンビア大学経営大学院日本経済経営研究所客員研究員
30.3 日本銀行副総裁



【総裁】

黒田東彦

[くろだ・はるひこ]
昭和19年10月25日生
出身地 福岡県

- 昭和 42.3 東京大学法学部卒業
42.4 大蔵省入省
62.7 大蔵省国際金融局国際機構課長
63.12 大蔵大臣秘書官事務取扱
平成 1.8 大蔵省主税局国際租税課長
2.7 大蔵省主税局税制第一課長
3.6 大蔵省主税局総務課長
5.7 国税庁大阪国税局長
6.7 大蔵省大臣官房審議官
(国際金融局担当)
8.7 大蔵省財政金融研究所長
9.7 大蔵省国際金融局長
10.6 大蔵省国際局長
11.7 財務官
15.3 内閣官房参与
15.7 内閣官房参与
一橋大学大学院経済学研究科教授
17.2 アジア開発銀行総裁
25.3 日本銀行総裁
25.4 日本銀行総裁<再任>
30.4 日本銀行総裁<再任>

日本銀行の総裁再任、副総裁就任

▼日本銀行の黒田総裁が再任され、雨宮副総裁・若田部副総裁が就任しました。

大分支店が開設七〇周年記念企画展を開催

▼大分支店では、支店開設七〇周年を記念して、大分県出身の四名の歴代総裁（山本達雄、井上準之助、一萬田尚登^{いちまだひさと}、三重野康）にスポットを当てた企画展「大分出身の日銀総裁〜日銀大分を築いた男たち〜」を三月十四、十五日に開催しました。



大分県出身の総裁による直筆の書などを展示

▼企画展では、事前に各総裁の出身地を訪れ、縁故のある方々

から伺ったエピソードなどをご説明しました。また、遺品等をお借りして展示し、総裁の功績とともに生い立ちなど身近な一面もご紹介しました。

▼見学者の方々からは「日銀総裁を身近に感じた」「同じ大分県民として誇らしい」などの感想が寄せられ大変好評でした。

第一九回情報セキュリティ・シンポジウムを開催

▼金融研究所情報技術研究センター（CITECS）では、三月一日に「量子コンピュータが金融サービスのセキュリティに与える影響」と題する情報セキュリティ・シンポジウムを開催しました。金融機関等から約一二〇名が参加しました。

▼今回は、金融分野でも量子コンピュータへの関心が高まりつつあることを踏まえ、その開発動向や金融サービスへの影響について取り上げました。金融研



パネルディスカッションの様相（撮影：野瀬勝一）

究所スタッフや外部有識者による講演やパネルディスカッションが行われ、活発な議論が展開されました。（Webページアドレスは <https://www.imes.boj.or.jp/citecs/symp/19/>）

ファイナンス・ワークショップを開催

▼金融研究所では、三月五日に、金融市場や中央銀行業務におい

て重要性を増している「ビッグデータと人工知能を用いたファイナンス研究の展開」をテーマとしたワークショップを開催しました。参加者数は、研究者・実務家を中心に約八〇人に上りました。

▼白塚重典^{しらかげのり}所長による開会挨拶に続いて、東京大学・和泉潔教授によるキーノートスピーチが行われた後、三本の研究論文



ファイナンス・ワークショップの様子

が報告され、参加者の間で活発な議論が行われました。金融研究所では、今後もこうした最新のファイナンス研究に関するワークショップを開催していきたいと考えています。

国際コンファランスを開催

▼一九八三年以来、日本銀行は、金融研究所において国内外の著名な経済学者や中央銀行関係者を招いた国際コン



ラジアン教授と黒田総裁（撮影：野瀬勝二）

ファランスを開催しています。今年、「Central Banking in a Changing World」（変貌する世界における中央銀行の政策・業務の実践）をテーマとして、五月三十日、三十一日に開催しました。

▼黒田東彦総裁による開会挨拶に続いて、シカゴ大学ラダラム・ラジアン教授による前川講演が行われた後、参加者の間でテーマに基づく活発な議論が展開されました。日本銀行では、今後も国際コンファランスを通じて、中央銀行の政策と業務の実践に関する知見を深めていきたいと思います。

日本銀行のホームページにダイバーシティへの取組みについてのページを新設

▼日本銀行は、二月二十六日、日本銀行ホームページに、ダイバーシティ推進にかかる施策等

ダイバーシティへの取組み

トピックス

女性活躍推進法

日本銀行は、2017年に女性活躍推進法に基づく認定「えるぼし」の最高順位、第3段階を取得しました。

詳細については、通知「女性活躍推進法に基づく「えるぼし」認定の取得について（2017年6月6日）」をご覧ください。

次世代育成支援対策推進法

日本銀行は、2010年および2014年に、次世代育成支援対策推進法に基づく認定「くるみん」を取得しています。「くるみん」認定は、育児と仕事の両立支援のための行動計画を策定し、定めた目標を達成するなどの一定の条件を満たした場合、「子育てサポート企業」として厚生労働省より認定されるものです。

ダイバーシティの取組みについてのページ
<http://www.boj.or.jp/about/diversity/index.htm/>

をまとめたページ（「ダイバーシティへの取組み」）を新たに開設しました。

▼同ページでは、日本銀行のダイバーシティに向けたこれまでの取組みや育児・介護と仕事の両立支援制度、働き方改革推進施策等を紹介しています。次世代育成支援対策推進法や女性活躍推進法に基づく行動計画についても掲載しており、今後の取

組みについてもご確認いただけます。

▼日本銀行は、今後ともダイバーシティ推進に関する取組みを進めるとともに、同ページを拡充してまいります。

「日銀春休み親子見学会」の開催（「日銀夏休み子ども特別見学会」のご案内）

▼日本銀行本店では、三月

二十七日～二十九日の三日間にわたり、小学校四～六年生および中学生のお子さまとその保護者の方を対象に、「春休み親子見学会二〇一八」を開催しました。今回は、合計一二九組二七八名の皆さまにご参加いただきました。

▼見学会では、本店見学やお札に施されている偽造防止技術の



お札の「すかし」を確認する様子

本物と同じ一億円の重さを体験（左）。記念撮影用の顔出しパネル（下）



紹介、一億円の重さ体験やお札の数え方体験などのプログラムにご参加いただき、日銀やお金について楽しみながら学んでいただきました。見学者の方からは「お金の大切さについて親子で学ぶ良い機会となった」などの感想が寄せられました。

▼毎回好評をいただいております親子見学会の次回の開催は、夏休み期間中の八月六日～十日を予定しています。

▼「日銀ってなにをしているところ？」というお子さまの好奇心にお応えできるようなプログラムをご用意しております。

▼参加は無料です。お申し込み方法などの詳細は日銀HPをご覧ください。皆さまの卓越しを心よりお待ちしております。



「第一四回 日銀グランプリ」
「キャンパスからの提言」
論文募集

応募締切：九月三十日（日）

▼「日銀グランプリ」は、学生の皆さんを対象に開催する金融・経済分野の論文・プレゼンテーションコンテストです。学生の皆さんが金融・経済に関心を持ち、わが国の金融の現状と将来について考えていただく場として、二〇〇五年度から毎年開催しており、今年度も応募論文を募集中です。

▼テーマは「わが国の金融・経済への提言」です。わが国の金融・経済に関するものであれば、どのようにテーマを設定していただいても構いません。

▼書類審査を通過したチームは、十一月下旬頃に予定している決勝大会において、日銀副総裁をはじめとする政策委員会メンバー、外部有識者の方を審査員

編集後記

■5月7日をもって情報サービス局長を退任し、本号の編集が編集長としての最後の仕事となりました。この約2年間、読書の皆さまに、広く日本銀行へ親しみを感じていただきたいとの思いで、9号分の編集に携わってまいりました。ご愛読いただきまして誠にありがとうございました。今後とも、新編集長の下での「にちぎん」をどうぞよろしく願いいたします。

(鶴海)

■このたび編集長に就任しました。日本銀行に入行して29年目となりますが、これまでは主に金融モニタリングや国際関係の仕事に携わってきました。広報誌「にちぎん」については、愛読者の一人から初めて作成する側に立場が変わりますが、新しい視点なども取り入れながら、引き続き日本銀行の活動をわかりやすく紹介していきたいと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

(中川)

※本誌は、全国の日本銀行本支店および貨幣博物館、旧小樽支店金融資料館等でお配りしています。個人の方の定期購読、郵送はお取り扱いしておりませんのでご了承ください。なお、既刊号全文をPDFファイル形式で日本銀行ホームページ上に掲載していますのでご利用ください。

(http://www.boj.or.jp/announcements/koho_nichigin/index.htm/)

※本誌に掲載している内容は、必ずしも日本銀行の見解を反映しているものではありません。日本銀行の政策・業務運営に関する公式見解については、日本銀行ホームページ (<http://www.boj.or.jp/>) をご覧ください。

にちぎん 2018年夏号
編集・発行人 中川 忍
発行 日本銀行情報サービス局
〒103-8660
東京都中央区日本橋本石町 2-1-1
☎ 03-3277-2405



デザイン 株式会社市川事務所
印刷 株式会社アイネット
©日本銀行情報サービス局 禁無断転載

に迎え、プレゼンテーション・質疑応答を行っていただきます。

▼当グランプリでは、Webページを設けて、募集要項や、過去の決勝進出チームの論文・プレゼンテーション資料、審査員講評のほか、奨励賞論文の要旨も掲載しています。また、過去の決勝大会の様相を収録した動画も配信しています。

▼応募に当たっては、日銀グランプリWebページ上の募集要項をお読みください。多くの学

生の皆さんからの斬新な提言をお待ちしております。

(日銀グランプリWebページアドレスはhttp://www.boj.or.jp/announcements/nichigin_gp/index.htm/)

【日銀グランプリのお問い合わせ先】
日本銀行情報サービス局
総務企画グループ
〇三・三三二七七・一六〇九



第14回
日銀グランプリ
キャンパスからの提言

学生のための小論文・プレゼンテーションコンテスト

課題「わが国の金融・経済への提言」

日銀グランプリは、日本銀行が毎年開催している、学生の皆さんを対象とした金融・経済分野の小論文・プレゼンテーションのコンテストです。多くの皆さんのご応募をお待ちしています！

応募資格 現在、大学(短大等を含む)に在籍の方(大学生等は除く)、2~4名1組のグループでご応募ください。

受賞内容 最優秀賞/1チーム(副賞:図書カード15万円)
優秀賞/2チーム(副賞:図書カード3万円)
特別賞/1チーム(副賞:図書カード3万円)

※応募の詳細は最新の募集要項および日本銀行ホームページをご覧ください。

<http://www.boj.or.jp/>

締切 9/30 必着 主催 日本銀行



ウェストミンスター橋から見た補修工事前の英国議会議事堂 ©The UK Parliament. 撮影 (Artist): Jessica Taylor

時を刻み、 時を見守る2本の針

「時の流れに対応するため、ビッグベンを改修し、デジタル時計にすることになりました」

1980年4月1日、英国の公共放送BBCはこう報じました。実は、エープリルフールのジョーク(注1)でしたが、BBCでは古くからビッグベンの鐘の音を国内のみならず世界中に時報として流していたこともあり、デジタル化を嘆く手紙が数多く寄せられたそうです。

ビッグベンの歴史は古く13世紀末、国王エドワード1世が、貴族や聖職者だけでなく各都市から2名の市民を招集して1295年に開催した「模範議会」の頃にさかのぼります。現在の塔は1859年に完成し、「クロック・タワー(時計塔)」という正式名称でしたが、2012年にエリザベス女王即位60周年を祝い「エリザベス・タワー」と改められました。厳密には、ビッグベンは塔内の鐘の愛称で、現在の塔の建設時の現場監督ベンジャミン・ホールの名に由来するという説が有力です。

このビッグベン、現在補修工事が進められています。約35年ぶりの大掛かりな工事で、15分おきに鳴る

小さな鐘、1時間おきに鳴る大きな鐘ともに昨年8月から止められています。建屋も足場に覆われていますが、英国議会議事堂側の文字盤は足場から顔をのぞかせ、時を刻んでいます。

そのビッグベンに見守られる英国議会は、「模範議会」からみても700年を超える長い歴史を有していますが、女性が国会議員選出の投票権を獲得したのは、わずか100年前の1918年でした。今年はその100周年にあたることから、「Vote100」という女性の政治参加をテーマとした各種イベントも国内で開催され、英国議会のホームページ上でも女性の投票権獲得の歩みが紹介されています。

サッチャー、メイ両首相の活躍にも象徴される英国人女性の政治参加の歴史を見守ってきたビッグベン。今年2月には女性初の黒杖官(注2)が任命されるなど、この歴史には今後も新たなページが加わるでしょう。

ビッグベンは、2021年に予定される補修工事完了後も、昔と変わらぬ2本の針が時を刻み、時を見守ります。(日本銀行ロンドン事務所)

*本コーナーは海外で働く日本銀行職員または日本銀行からの出向者が執筆しています。

(注1) 英国では、BBCをはじめとしたメディアが4月1日にジョーク記事を流し、多くのメディアの受け手はそのジョークネタを楽しんでいます。
(注2) 英国議会上院で、儀仗と警務を担当する職務。



テムズ川対岸から見た英国議会議事堂



補修工場の足場に覆われている様子



にちぎん